# チョコレートエルフの愉快な日常

CanI_01

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

第六世界の日本帝国関西スプロールを舞台にした物語。

フォーマーカンパニメイジであるエルフ、ティターの酒と食事とランの日々をぼやっと書いていきます。

関西スプロールおよびそれに付随する設定の多くはオリジナル設定となります。

# 目次

日本帝国史概要 ―― 1
神戸スプロール地域ガイド ―― 12
よくある仕事、よくある結末 ―― 20
龍と人の不幸な関係 ―― 35
ストレイトオークワルツ ―― 48
シアワセ大将軍の軍艦マーチ ―― 59
外伝：茶畑要塞防衛戦 ―― 72

# 日本帝国史概要

１９４５年８月１４日大日本帝国はポツダム宣言を受け入れ無条件降伏を行った。

第二次世界大戦あるいは大東亜戦争の終結である。

これにより万世一系の君主たる天皇陛下の治める大日本帝国は滅亡した。

結果アメリカ合衆国の信託統治下において日本と言う新たな国が生まれたのだ。

少なくともアメリカ合衆国はそう考えた。

その為に農地を、財閥を、労働組織を解体し、総力戦を行えない国家に改造をしたのだ。

この中で五大財閥は解体され法律的に同じ組織ではなくなったが、彼らの中の愛社精神と愛国心は制度のくびきを逃れ協調し再び日本を世界に誇る国家に躍進させようと活動を続けた。

再び力を付け敬愛する主君をいだく。そのための雌伏の時と考え皆が努力を続けたのだ。

この中でも特に力を付けたのか後に１０大メガコーポの一角を占め、最初のメガコーポとなった倖財閥なのだ。

シアワセは財閥解体の影響を受けながらも系列企業群として倖一族の影響を維持し最終的に８０％の株式を保持し日本経済を下支えしてゆく。

当初アメリカは狂信的なまでの忠誠心により果敢に第二次世界大戦を戦った日本に恐怖し２度とアメリカに牙を向けない国家へと作り替えることを目指していた。

だが、ロシアを中心とした共産主義勢力の圧力に晒されたことから狂信的な国粋主義者を活用した国防体制の構築をすることを強いられた。

ここで目をつけたのがヤクザである。

ヤクザ達は玄洋社の設立に深く関与しており国粋主義者のネットワークや労働組合などに絶大な影響力を持っていた。

更に従来は経済的な存在であったヤクザの構成員が第二次世界大戦に伴う徴兵により兵士として訓練され暴力装置としての能力を手にし脅威度が増大していた。

戦後の帰還兵による治安の悪化も身近に迫った危機として存在していた。

これらの諸事情から１９５０年の朝鮮戦争において在日米軍の朝鮮出兵時の軍事的な空白を埋め政治的な対応組織として警察予備隊が成立し、その指揮官は自身の舎弟を引き連れたヤクザ親分達であった。

彼らは未だに天皇陛下を神として崇め従う国粋主義者達だったのだ。

この後警察予備隊は自衛隊へと改組されて時と共に国防力を増大させていくことになる。

１９５６年には朝鮮戦争の戦争景気の後押しもあり日本は戦後の混乱を脱却しより豊かなより力のある国家を目指して邁進することになる。

このような好況感の影響によりヤクザ達は自衛隊からは手を引き経済活動に勤しみその富を増大させていった。

そんな順調に見えた日本経済に影がさすことになる。そう１９９１年のバブル崩壊である。

好況感に沸き立っていた日本は冷水を浴びせられることとなり様々な企業の統廃合が進んでいく。

この流れの中でビッグ８となる渕工業電子が、当時電機メーカーとして著名な山名電機と機械メーカーであるデキタ工業の合併により成立した。当然ながらこの合併は生き残りのための不本意な合併であり、この確執により渕は最終的に命脈を失うことになる。

他にもミツハマはバブル崩壊により経営が悪化し倒産する直前まで追い込まれていた。当時ミツハマの経営権を引き継いだ，猛虎，三浜大河は三浜に資金を貸し付けていたヤクザの親分の所に乗り込み自身の経営計画をプレゼンし莫大な融資を取り付け、わずか2年で寄せ集めの重工業メーカーであった三浜をロボ、重工業、コンピュー

ターの世界に冠するメガコーポに育て上げだ。
この逆風により日本企業は淘汰され後のメガコーポとなり得る国際競争力のある企業のみが生き残り経済帝国日本の礎を築いたと言える。
とは言え、経営者が日本人としてのプライドから外資系企業買収を拒否したことからこの経済再編は主に国内企業で完結していた。結果的に日本と企業が同族として活動し、後のジャパンコープの隆盛の１つの要因になったと言えるだろう。
特にシアワセ系列企業では倖江守と言うシアワセ中興の祖とも呼べる強力な指導力を持ったＣＥＯを抱くことにより実質的に財閥化し、解体前以上の力を獲得したのだ。
後にスロバキアのケルパーを買収しレンラクへと改名することになる姉木稲造もこのバブル崩壊の混乱から莫大な資産を築き上げている。
２０００年には日本経済は立ち直り、その好調な税収により世界２位の軍事予算を保持し、明確に軍事大国としての立場を確立していた。
この背景には２０００年にシアワセがアメリカにおいて治外法権を獲得し様々な制約から開放された上でのビジネスの展開が行われたことも一因となっている。この治外法権は他国へも広がり結果的にメガコーポの治外法権が世界中で認められることになる。
日本はこの軍事力を活かし自衛隊を平和維持軍として国連の指揮下において世界中を転戦し膨大な戦闘経験を積んでいった。
この実績の元に国粋主義的政治家達は自衛隊に課された制約を徐々に緩和していく。
２００５年に大韓民国の大統領である李大中が陸軍元帥である充京韓により暗殺される。
充はこの暗殺が共産主義者による陰謀であると宣言し北朝鮮への侵略を開始する。
日本は邦人を戦火から守ると言う大義名分を盾に朝鮮に出兵し韓国の支援を行う。

同年北朝鮮は日本の大都市に対して核弾頭ミサイルを発射する。しかし、粗悪な品質であった弾頭は奇跡的に一発たりとも起爆をしなかった。

これにより本格的に第二次朝鮮戦争に参戦した日本の尽力もあり朝鮮統一が果たされる。

この勢いを持って日本は継日帝を主として抱く再び帝国を名乗ることになる。

日本帝国の復活である。

これに伴い自衛隊は帝国軍へと名前を変更することになる。

この時点では天皇陛下はあくまでも皇國の象徴であり政治とは切り離された存在であった。

また、宮内庁は日本帝国の機関からは独立し、皇室と天皇陛下を護るための防諜、警備をもその職務として持つことになる。

この事から近衛兵の所属も宮内庁となる。

２０１１年覚醒により龍冥が富士山より姿を現す。即座に日本の２大魔法組織である伊勢神宮と比叡山延暦寺を訪問し交渉を行った。これにより龍冥は神としての地位を手に入れスムーズに日本帝国での影響力を増大させていく。

後の企業法廷を構成することになるミツハマとシアワセ（レンラクはまだない。）があることからわかる通り、この時期のジャパンコープの勢いは世界中で増しており、この企業の成功を日本の成功へと変換するために２０１２年、時の首相の風間嵩威と、彼率いる継神党が「大和法」を成立させた。

この法律は拡張政策を是とし独占禁止法の撤廃、外資系企業による国内企業の買収に制限を加えるものであった。

これによりジャパンコープは有望な中小企業の買収を進め、その開発力と経済力により世界中へと影響力を深めていったのだ。

この法律によって日本の基調通貨である円をニューエンに置き換えた。

これによって大企業と日本経済を連動する状態としたのだ。。

また、大和法はこれ以降の帝国主義的な活動と反メタヒューマン活

動を支持するための法律となっていく。
２０２０年に日本は矢継ぎ早に太陽光発電衛生天火明（アメノホアカリ）を打ち上げ、マイクロウエーブにより送電をすることでエネルギー問題を解決した。
更にこの安価なエネルギーはアジアや南米を席巻していくことになる。
２０２１年にゴブリン化か発生しトロールやオークにヒューマンが変化する。これによる混乱が発生する。
メタヒューマンの家族を持つことは不名誉であると考えられていた。彼らは鬼であると見なされ外人よりも下の存在と見なされたのだった。
企業の進出に伴い皇軍も国民とその資産の保護の為に進出を開始する。２０２１年には日本帝国はフィリピンを侵略する。これはゴブリン化清浄化作戦として実施された。
２０２７年には日本の４８番目とすることに成功した。この背景にはヤクザを通してミツハマに影響力を行使した龍冥の意思があったと言われている。龍冥はフィリピンにある龍脈の結束点の確保により自身の力の増大を目指していたのだ。
この勝利を皮切りに企業と共に皇軍は世界へと展開しペルー、オーストラリアへと展開を行った。
また、２０２７年には大和法が改正されメタヒューマンをフィリピンの火山島である黄泉島（旧名ラグラグ）への隔離政策を実施する。とはいえ、犯罪者や生活保護などの理由がなければ強制隔離は実施されなかった。
２０３０年クラッシュにより創業者を失ったビッグ７の一角ケルパーインターナショナルを日本の投資家である姉木稲造か買収。
社名をレンラクコンピューターテクノロジーに改名し本社を千葉に移転する。
２０３３年、クラッシュウイルスに対抗するために開発されたサイバーデッキを販売することにより莫大な利益を上げた渕はビッグ７の一角であるＪＲＪインターナショナルを買収しビッグ７に連なる。

２０３６年にはアメリカより独立して成立したカリフォルニア自由州の要請に従い出兵し、実質的な支配下に置くことになる。
２０３９年に渕後援の元、東京国際マトリックス仕様会議が開催され世界中のマトリックスネットワークのデファクトスタンダードが決定される。
２０４２年にビッグ７のうち４社をジャパンコープ抑えられたことに焦りを感じた他３社は対日本戦線に加えるためにヤマテツ（現イーボ）がビッグ８に加わるが、ヤマテツはジャパンコープとして活動することになり、ジャパンコープの絶世期を迎えることになる。
好調な日本帝国の最初の陰りはヤマテツから始まった。
２０５９年、ヤマテツのＣＥＯにオークであるユーリ・芝小路が就任し過激なメタ差別に対してヤマテツのロシア移転を断行。
これにより日本帝国はビッグ１０の一角であるヤマテツを失うことになる。更にヤマテツは五行公司の主導する対ジャパンコープ連合である環太平洋共栄連合に加盟し反日本の立場を鮮明にする。
この動きが日本の株式市場に与えた影響は大きく東京証券取引所は７０年来最大の下げ幅を記録しホワイトマンデイと呼ばれる。
２０６０年にはダンケルザーンの遺産により内紛が激化した渕が崩壊し日本帝国からビッグ１０が、また１つ減少する。
そして、日本帝国は大きな転換期を迎える。
２０６１年にリング・オブ・ファイアの発生である。
２０６１年１０月２７日、九州の雲仙岳が突然噴火する。これによる土石流は島原半島にまで迫り空は火山灰に覆われた。
これを受け帝国政府は国家緊急事態宣言を布告。九州の交通を全て停止。
合わせて韓国含めて航空機および亜軌道シャトルの運行を停止させる。
これに伴い日本帝国はジャパンコープに救援要請を行う。ミツハマは要請に応え３０分後には空軍を現地に送り込み救助活動を開始する。
この噴火を引き金とするように神奈川県沖でマグニチュード７・

２の地震が発生し、日本の太平洋側に津波を引き起こす。
当然この影響は日本に留まらず太平洋沿岸地域に莫大な被害をもたらすことになる。
風間総理は地形イメージングと災害予測のためのシステムを導入していたシアワセエンビロテックに原因究明を命じるが、シアワセは災害に責任を負うものではないとして拒否し、政府とシアワセの間の緊張が高まる。
この噴火により島原半島に行幸中の天皇家は巻き込まれ全滅する。
唯一の生き残りは継日帝の孫である泰仁親王のみであった。
泰仁親王は火山灰が降りしきる有明海の海岸線を裸で薄汚れた姿で１人で歩いているところを九州の巫女により発見される。発見した巫女によるとその身は強力な魔法の加護により護られていた。
しかし、事件後の調査では泰仁親王には全く覚醒者としの素養は持たなかった。
リング・オブ・ファイアの公的な被害死者２４万人。これにはヤマテツ（現イーボ）の早乙女海底ドームを筆頭にメガコーポのアーコロジー内部での死者数は含まれていない。
２０６２年１月３日、風間総理はこの噴火に巻き込まれ行幸中の継日帝が崩御したと発表する。天皇陛下と皇室の面々が有明海沿いの天領にある神社の遷宮式に行幸中であった。この際に彼らは震災に巻き込まれたのだ。
この震災の唯一の生き残りである継日帝の孫である１４歳の少年、泰仁親王が新帝として１月５日に即位した。
元佑の世の始まりである。
この２ヶ月の遅滞は先帝の埋葬と政権内での意思統一の為に費やされたのだ。
元佑帝が１８歳になるまでに、皇室会議は摂政として皇族の数少ない生き残りであり、元佑帝の遠縁の従兄弟にあたる米倉太郎を摂政に任命すミツハマは公然と優秀な指導者がいなければ国家の復興は不可能であると政府を非難した。
また、世襲議員や宮内省内部の元貴族である公家の中でも年重の者

は元佑帝にはオニとして生まれた兄弟がおり、黄泉島に送られたとの噂があることから穢があるとして嫌っている。
このような混乱する政局の中で元佑帝は即位式の中で自らを現人神であると宣言する。この宣言を神道勢力が支持を表明する。覚醒により力を増した神道勢力の後押しもあり、これは受け入れられることになる。
元佑帝と米倉は再建を加速するために海外に駐留している帝国軍に即時帰還し国内復興に従事するように命令を下す。
これにより大半の部隊は国内に即時に帰還する。
この影響は海外で帝国軍に警備を委託していたジャパンコープに混乱をもたらすことになる。
例外はカリフォルニア自由州に展開していた斎藤将軍の部隊とペルーに展開していた帝国軍である。
斉藤はメガコーポやヒューマニスト組織の支援を受け自立することを決める。
ペルーの帝国の指示を無視しレンラクの施設警備を継続することを決定する。
そんなか国内では帝国はミツハマを警察と復興軍として雇入れる。
しかし、暴走族を中心としたストリートギャングによる治安の悪化は加速し、メガコーポの企業軍が治安維持活動に展開。更に限定的な武装の許可を国民を発行することになる。
この治安維持活動を名目に企業同士の暗闘も増加。ミツハマは暴走したＡＩの研究所を制圧するという名目でレンラクの研究所を襲撃し研究データの奪取を行った。
２０６３年、このような混乱を鎮めるために政府はジャパンコープとの特殊会談を実施する。
これには政府側として元祐帝、米倉摂政、風間総理、神道組織のトップが参加し、ジャパンコープの代表者たちと相対した。
この１６時間に及ぶ会談の結果、大和法が一部改正されメタヒューマンの隔離政策の廃止と外資系企業の国内参入が可能となった。
この日本のビジネスの変革を支持した国内企業に元祐帝は個人的

な感謝を示し会談は終了することになる。
元祐帝は現人神と名乗るが日本帝国の象徴であることには変わりなく、あくまでも間接的な影響力を行使しているに過ぎない。
この結果に対して竜冥は神の1柱たる今生帝がビジネスに口を出すべきではないと苦言を呈している。
更に都市復興を任せられると考えていたジャパンコーポはさらに裏切られる。
今回の震災の原因が企業の無秩序な開発による穢れの影響であるとして神の意志と能力を用いた本州の復興を進めると宣言。
これによりジャパンコープは主に物流を担い、神々が介入できないほどアストラル的に汚染されている長崎と広島、本州以外の九州、北海道、四国、千島列島、フィリピンの復興を担うこととなる。
この復興に合わせて東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県を統合し東京スプロール、ネオ東京とし一元的な復興を行うことになる。
この復興に合わせてネオ東京では世界に先駆けてワイヤレスネットワークを導入する。この利権を狙っていたレンラクだが当時の最先端技術を保持していたトランシスニューロネット（後のネオネット）がこのシステム導入を請け負うことになる。
そもそもリング・オブ・ファイアは何故起こったのか。
この背景には環境的な要因と人的な要因がある。
中国に君臨するグレートドラゴン嵐（ラン）と、日本帝国の竜冥は第四世界からら対立関係にある。正確には嵐の弟子であった竜冥が嵐の知識を求めて襲い掛かっている。
その力の差は歴然としており竜冥が敗北し続けているのだ。
第六世界では日本帝国の皇族やミツハマに莫大な影響力を持つ竜冥は彼らを操り龍脈を確保しその力を吸い上げている。
フィリピンには環太平洋造山帯の龍脈の結束点があり、日本帝国がフィリピンを占領した背景には結束点を狙った竜冥の意思があった。
反面嵐は竜冥が龍脈を乱すことをよく思っておらず彼は龍脈を制圧しその調和を保つように調整を行っていた。
そしてアジアにはもう一者龍脈を乱す存在がいた。五行公司であ

る。ダンケルザーンより龍脈を支配するためのアーティファクトである幸運の金貨を贈られた五行公司はその力を用いて地脈を操作し、自分たちに有利な風水を築いてきた。
ハレー彗星の到来により地球の魔力が増大し乱されていた龍脈が一気に火を噴くことになる。
これがリング・オブ・ファイアである。
当然ドラゴンや強力な自由精霊であるバタカップは、この震災がいずれ来るものとして予想できていた。
これを利用して竜冥の息のかかった皇族を一気に排除し年若い新帝のみを助け出す。
後にバタカップが元祐帝のアドバイザーとして暗躍することを考えると元祐帝を噴火の中で救い出したのはバタカップなのではないだろうか。
更に龍脈の結束点であるフィリピンにはヘスタビーの指示を受けた若きグレートドラゴンマサルが送り込まれる。
環太平洋造山帯の日本軍の多くも撤退。
五行公司に対してもヘスタビーとバタカップによってランナーが送り込まれ風水への介入が行われる。
これにより大きく竜冥の力を抑えることになったと言えるだろう。
同年３月にシアワセのＣＥＯである倖忠は娘の仁美と元佑帝の婚約を発表し、２年後の結婚を宣言する。
また、米倉摂政の後押しによりこれまでメタヒューマンを一切登用しなかった近衛兵にメタヒューマンを登用。
２０６３年１１月、ＵＣＡＳ留学中の倖仁美が誘拐されるが無事救出される。
２０６４年３月。フィリピン県知事が暗殺され、新任の知事は帝国海軍を展開し戒厳令を敷く。
そして２０６４年４月、元祐帝と倖仁美の結婚式が伊勢神宮にて執り行われる。
この結婚式には竜冥の声である石野あかねが参加し引退後公的な場で行っていなかったパフォーマンスを行う。これにより即位後の

方針で対立していた竜冥が元祐帝に対して歩み寄った証拠と言えるだろう。
１１月クラッシュ２．０が発生し、日本も甚大な被害を受けることになる。
このクラッシュ２．０により太陽光発電衛星天火明の大半がブラックアウトしたりコントロールアウトにより消失することになる。
すでに維持コストが核融合発電と逆転している天火明はこの影響から廃棄が決定される。
しかし、レンラクにより草の根活動により一台のみメンテナンスを行いネオトーキョー上空に留め交通管制衛生として使用することになる。
２０７０年、議会をテクノマンサーの能力を測定する試験を子供に義務付ける法案が通過。同時に仁美皇后肝いりでテクノマンサーおよび潜在的テクノマンサー専門の国立小学校が設立される。
２０７１年、仁美皇后が日本帝国皇太子となる朝香宮成仁殿下（アサカノミヤナシヒトデンカ）を出産する。
２０７４年、仁美皇后第二子として桜皇女を出産する。
しかし、桜皇女がバンパイアであったために現在は二条城に幽閉されており、皇居には替え玉が養育されているという噂もある。

# 神戸スプロール地域ガイド

神戸スプロールは覚醒以前から行われていた政府主導の企業誘致によって、近年においても特定企業の企業城下町とならずにすんだ数少ないスプロールです。

更に霊峰六甲を北面に持ち魔法産業も活発で、神戸市主導の企業誘致が今でも行われております。口が悪い者は神戸コーポレーションと呼んでいますが、神戸市はそれを誇りとして、神戸市のコウムインは自らを冗談交じりにシティーオフィサーではなくコーポレートオフィサーと呼んでくれと口にします。

しかし、その繁栄も２０６１年の震災によって陰りが現れます。この震災によって神戸の貴重な財源であったポートアイランド研究要塞都市及び西神工業地帯に壊滅的な打撃が発生したのです。この状況から復興するために多くの企業が影響力を増していき、かつての経済都市神戸コーポレーションは姿を消しつつあります。

神戸スプロールは主に以下の８つのエリアに分かれています。

・三宮エリア
・元町（南京町）エリア
・ポートアイランドエリア
・西神エリア
・六甲アイランドエリア
・新開地エリア
・岡本エリア
・灘エリア
・三宮エリア

三宮エリアは官庁街と社会適応者向けの安全な歓楽街で構成されています。ここはＪＲとシアワセ電鉄（旧阪神・阪急電鉄＝ＳＲ）の駅が集まっており、神戸スプロールの玄関口となっています。

このエリアでは、酔いつぶれて路上で寝込んでも朝日を拝めると評判で、２０世紀後半の治安を維持しています。ここの治安は神戸市警とヤクザによって維持されています。

神戸市警は自らの企業権益に対して便宜を狙っている企業が提供している警備スタッフです。企業同士の確執はあるものの概ねうまく運用されています。

また、ヤクザは隣接する元町エリアの三合会からの影響を抑えるための絶え間ない努力により、ヤクザの影響力が強くいわゆる半端者の事件が少なくなっています。

また、三宮エリア北部にはかつてからの観光地である異人館が残っており、海外や国内の余所の土地からの観光客も足繁く通っています。

・元町（南京町）エリア

中華街と呼ばれ、華僑が多く住むエリアです。

三宮エリアとは違い三合会が影響力を持っています。しかし、元町エリアは観光地としての側面も持つため治安はよく保たれています。

比較的日本人が多いこのスプロールにおいて外国人が多いエリアでもあります。

また、五行公使の支社もこのエリアにあります。

このエリアでは怪しい様々な素材がひっそりと売られている店が数多く存在します。食材として呪文素材が売られていることも決して珍しくありません。

・ポートアイランドエリア

１９００年代末期より、北部は住宅地、南部は研究都市として開発がされてきた人造島です。

しかし、ＶＩＴＡＳによって人口が減ったため、住宅地部分がゴーストタウンとかしました。そこで、神戸市は巨額の資金を投資しこの島を研究要用塞都市として作り替えました。幸いには、この島の南には国際便の発着が可能な神戸国際空港があり、当時すでに世界的に名前を馳せていた理化学研究所があったため、誘致は容易でした。２０５０年頃までバイオ技術系企業がこの人造島に研究所を置き中立的に基礎技術を開発する（ということになっている）理化学研究所との共同研究を行っていました。

この島内はポートアイランド運営局が維持管理を行っており、彼ら

には企業自治権と同様の権限と武力が与えられています。これによって画期的な技術シーズを持つベンチャー企業がセキュリティーに資金を費やすことなく研究を行っています。

しかし、このエリアは61年の震災で完全な更地となりました。その上、多くの研究者が命を失ったことによるドメインの偏重及び本来無いはずであったバイオ生物及ぶ細菌類が海に流出し深刻なバイオハザードが発生しました。即座にシアワセ・エンバイロメントが神戸市に打診を行った結果、バイオハザードが拡大することは食い止められました。しかし、現代でもこの近隣海域では生物学的にも魔法的に異常な生物が現れることで知られています。

現在このエリアは、シアワセ主導の学園都市として整備し直されています。震災で壊滅した関西圏の学園を誘致統合し、神戸国際総合学院が設立されています。この学院に対してシアワセを筆頭に不思議なほど企業からの横やりが無く開放的な方針の総合学院が運営されています。

・西神エリア

かつては工場地帯であった六甲山脈中腹の工業地帯です。覚醒に伴って六甲山が密林化した際、神戸市が複数の魔術師を雇い環境共生都市へと作り替えました。その後、このエリアが龍脈上にあることが判明し、多くの魔法系企業が研究所を配置しました。

現在では、神戸市が龍脈を維持管理するために複数の様式の地霊魔術師を雇っており必要に応じてドメインを変異させるサービスも行っています。

また、このエリアへのルートは三宮エリアから出ている地下鉄のみです。この地下鉄を維持するために複数の魔術師が日々儀式を行っています。また、ここは魔法的な結界も張られており、常時精霊が巡回警備を行っています。この結界を維持するために各企業の研究所が一定の配置をされているとも言われています。

空か物理的に侵入することは簡単そうに見えます。ですが六甲山の上空では多くの計器類が乱れ、目視とマニュアル操作による操縦を要求されます。この為、無事に目的地に到着することができません。

・六甲アイランドエリア

かつてはポートアイランドと繁栄を競っていた人造島です。

ところが、２０６１年の震災により構造材に致命的な液状化が発見され、現在は閉鎖されゴーストタウンと化しています。

再三取り壊しのプロジェクトが立ち上がりましたが、予算を理由に現在まで一度も実現していません。

ここには、かつてのメタヒューマン隔離政策から逃れるために、隠れ住んだメタヒューマンの末裔が現在でも多く生活しています。彼らの多くは正職に就けないため、神戸市沿岸での海賊行為やハッカーなどで生活の糧を得ています。また、多くの中国からの密輸品がここで水揚げされ、様々なルートから国内へと流入していきます。そのためスマグラーも多くいます。

しかし、彼らにとって見知らぬ〝よそ者〟は常に危険と同意で扱われるため、多くの犯罪組織が六甲アイランドへの影響力を増大させようとしているにも関わらずいまだに成功していません。

・新開地エリア

東部は下層階級の住居と安酒場、風俗街が建ち並ぶ猥雑な活気ある街。一品物を作る職人やメガコープが作っていては割に合わない小物を作らされている下請け業者の街でもあります。総じて治安は悪くケンカも絶えません。繁華街には地元商店会が組織している自警団はいます。

自警団は殺人事件や店に被害を与えるのでなければ特に干渉はしません。

西部はすでに見捨てられたゴーストタウンとなっています。かつてはメガコーポの大型工場が建ち並んでいましたが、それらも度重なる海外移転で廃墟と化しており、ストリートキッズが雨露を防ぐために利用しています。当然ながらストリートキッズなどのギャング団以外の治安組織はありません。

・岡本エリア

かつてからの高級住宅街。朝などは企業のエグゼグの乗ったコミューターへりが大阪スプロールや神戸スプロールへと数多く飛び

立っていく。閑静な住宅街で、エリア近くの道路では常時ローンスターが検問を行っており、入るためにはＳＩＮの提示が必要となる。当然ながらＪＲやＳＲの駅でもＳＩＮの確認を求められる。

・灘エリア

中流階級の住宅街。多くのウエッジスレイブがこのエリアに住み、ラッシュにもまれながら出勤していく。

主要犯罪組織

山口組

神戸の岡本地区に本拠地をおくヤクザ。

渡田連合の傘下にあり古き任侠として神戸地区の治安に貢献している。

しかし、その治安活動はあくまでも自分たちの利益を護る為の行動であることを忘れてはならない。

元々のヒューマン至上主義思想は根強く、今生帝のメタヒューマンへの扱いの変化に対して対応ができないものが古参メンバーに多く組織内部での断絶が広がっている。

万獅子会

香港で壊滅した三合会組織黄蓮会の残党により作り上げた犯罪組織。

日本での影響力が弱いことから暴力的になる傾向がある。

また、地脈操作などのノウハウを十全に保持していることから、神戸市の実施するポートアイランドや西神地区の平定に貢献し五行公司の構成員として神戸市に影響力を行使することができるようになってきている。

主要企業

シアワセ電鉄

関西スプロールの電車、バス、土地開発に圧倒的な影響力を持ち社会インフラを支える企業の１社です。

前身である阪神電鉄の保持していた球団阪神タイガースを保持しており熱狂的なファンは健在。

五行公司

元町地区の華僑を中心に影響力を持つビッグ１０の１社。
特に風水の知識を生かした神戸市へのコンサル業務により外資系企業としては破格の影響力を手に入れている。
ヤマト運輸
日本のＡクラスメガコーポ。
日本を中心にアジア圏でシェアを伸ばしており、近年ＡＡクラスになるのではないかと噂されている。
単純な市場シェアで言えば飛び抜けているわけではないが、その売上と収益率は郡を抜いている。
この理由としてヤマト運輸が万全のセキュリティーによる確実な輸送を謳い文句に金額によらない商売を展開し成功してきたことが上げられる。
ヤマト運輸は都市間の治安悪化に対して民間保障警備会社の資格を取得し自らの防衛力を底上げしたことが現在の礎を築いたと考えられている。
当初は他企業の退役軍人などを中心に整備されたセキュリティーチームも現在は質量共に充実し、実際の都市間輸送トラックを警備するリガーとハッカーを中心とした警備チームは実戦
経験も豊富で防御車両を駆使した簡易防衛陣地を展開すれば、レンラクのレッドサムライやシアワセの神の武士とも対等に渡り合えると言われています。
また、営業エリアを緊急ジェットで１０分以内にＳＷＡＴ部隊を投入できるかを基準に分割しており、輸送トラックが襲撃を受けた場合、直ちに投入できる体制が整えられている。
また、以前ＡＡメガコーポヤカシマとの抗争により関西支社が甚大な損害を受けたことを教訓として黒猫忍軍と呼ばれる諜報部隊を要している。
彼らは信頼できるランナーチームの名簿を独自に整えており明確に襲撃が予想されたり緊急対策などでランナーを雇うことがあります。
ランナーの仕事としては珍しく合法的な仕事が多く、多くの場合は

任務中に使用するための限定企業ＳＩＮが発行されます。
組織構成
ヤマト運輸は三部門から構成されており、それは配達、長距離輸送、後方支援です。
配達部門
配達部門は都市部まで輸送された荷物を配達先に届ける部門です。
基本的にツーマンセルを基本として市民レベルで合法的な武装を身につけています。
通常は一方はボディガードの訓練を受けており最悪の場合でも1人で荷物を届けるように徹底されています。
もう一方も一般的な軍隊訓練を受けています。
※特殊輸送部隊としてデルタグレードのサイバーウェアに身を包み車両が入れないような場所に背負子を背負い荷物を届ける背負子部隊も居る。
長距離輸送部門
治安の悪い非都市部を輸送する精鋭部門です。
通常はリガーとハッカーの指揮官2人と複数のサムライや魔法使いで構成されたチームで輸送を担います。
特筆すべきは荷物の保全を最優先しており、襲撃を受けた場合は防御車両を駆使した簡易防衛陣地を構築しスワットの到着を待ちます。
しかしながら、輸送トラックと最低2機の防衛車両搭載の最低3門のオートキャノンと射撃の腕前、アルファグレードのインプラントは並みの強盗団で打ち破れるものではなく、最近は襲撃を受けることも減っています。
後方支援部門
緊急配備されるスワット部隊と事務スタッフ、諜報部隊で構成される部門です。
事務部門の部署長は必ずハッカーが配置され、通常はバックアップに複数のハッカーが配置されます。
必要であれば電子戦を仕掛けることも想定されています。
スワット部隊は重火器による仮借無き火力による攻撃を前提とし

た部隊です。輸送機の操縦は電子戦に長けたリガーが行い現地到着後は長距離輸送部門の指揮下に組み込まれます。
諜報部隊である通称黒猫忍軍は様々な場所で受付業務を行う担当者や物資や資金の動きを追うコンサルタント、主婦の傍ら情報提供する草などで構成されており、的確な防衛計画の立案の中心存在です。
藤原清美
「ヤマト運輸の藤原清美でございます。皆様に依頼がありお電話差し上げました」
ヤマト運輸関西支社長。
元クレーム対応オペレーターながら、過去の関西支社襲撃事件の際に一般社員を叱咤激励し、見事に支社のホストコンピューターとお客様の荷物を守り抜いたことで大抜擢された人物。
関西のブラックオプ全てを統括しており、関西スプロールでは彼女からの直通連絡を貰えるようになれば一流の証とも言われている。
関西支社襲撃事件（通称：黒猫抗争）
ヤマト運輸とヤカシマの抗争事件。
ことの発端はヤカシマがヤマト運輸の輸送能力に目をつけ意図的に囮や他メガコーポに狙われそうな荷物を依頼した上で敵対企業にその情報を流したことです。
これによりヤマト運輸の防衛部隊に甚大な被害が出るとともに何度か荷物を失う事態に至り、ヤマトはヤカシマの行為を悪質な営業妨害として企業法廷に対して提訴を行った。
喚問前に、最重要の資料があると思われた関西支社にヤカシマが襲撃部隊を送り込みヤマト運輸は多大な損害を出した。
しかし、結果的にデータは死守され企業法廷ではヤマト運輸の要求がほぼ認められる形を取った。
この事件による他メガコーポとの実戦経験と多額の賠償金によりヤマト運輸は更なる躍進を遂げたと考えられている。

# よくある仕事、よくある結末

２０７０年、日本帝国、神戸スプロール。
新幹線の新神戸駅の傍ら、六甲山の山裾に抱かれるようそびえるホテル、クラウンプラザ神戸。覚醒前からこの地にあり、世界の大変革など知らぬげに下界へと煌びやかな光を投げかける。
最上階３６階のレストランバー「Ｌｅｖｅｌ３６」で一組のカップルが、神戸の夜景を眼下に納めながら夕食を楽しんでいる。男性は４０代後半の日本人。落ち着いた雰囲気のベージュのスーツに身を包み、口元には髭を蓄えている。彼は窓際の席に陣取りながら眼下に夜景には目もくれず、相手の女性にばかり視線をそそぎ、まくし立てるようにしゃべり続けている。
一方女性は、２０代中盤で褐色の肌にウエーブがかかった黒髪、胸元が大きく開いた深紅のドレスに身を包んでいる。女性は男性の言葉に耳を傾けながらゆったりと微笑んでいる。だが、その視線は男性を素通りし、眼下の夜景に注がれている。
「そう言った状況でね。僕もなかなか休みが取れないと言うわけさ」
彼は得意げに語る。さも、忙しいことが優秀さを象徴するかのように。
「あら、そんな貴重なお休みを私なんかと過ごしても良いのかしら？
奥様がお怒りではないのかしら」
彼女は冗談めかす。
「僕は一人身さ。仕事が忙しくてね。それに今まで君のように素敵な女性とも出会わなかったしね」
「あら、誰にでもそんなこと言っているんじゃないかしら」
いたずらっぽく微笑み、続ける。
「でも、あなたも物好きね。地位のある方がこんなホテルでエルフとディナーだなんて。会社に知られたら査定に響くのではありませんこと」
彼は不敵に笑い、よく通る声で返答する。
「何そんな狭量なことは言わせないよ。僕の会社で種族差別は無いか

らね。それにその程度で評価を下げられるほど僕は無能じゃないさ」
「あら、頼もしいお言葉ね」
彼女はグラスに残ったワインを飲み干し、妖艶に微笑む。
「そろそろ行きませんか。貴重なお休みでしょう。たっぷり楽しまないともったいないわ」
男はうなずきいそいそと立ち上がる。同時に自らの脳内に埋め込まれたコムリンク—進化した携帯—を操りレストランのシステムにアクセス、電子的に勘定書にサインをする。
そして、２人は腕を組み彼が押さえている部屋へと降りていった。
部屋は３３階、神戸のみではなく大阪まで一望できる絶好の夜景。夜景を正面に据えたバーカウンター、そして当然のようにベッドは１つ。
「どうだい、まずは一杯」
女性は自然な動きでグラスとアイスボックスを引き寄せた。
「作るわ。何にします？」
男がコムリンクで操作をしたのか、部屋にジャズのリズムが響く。
「じゃあ、ブランデーをロックで」
彼女は迷わずコニャックのＶＳＯを手に取り、慣れた手つきで指二本分ほどグラスに注ぐ。そして、マドラーを一閃。氷とグラスの混ざり合う涼やかな音が響く。滑らすように男性の前に置き、自らの分を作るために同じ手順を繰り返す。
男性はツーフィンガーのロックが出てくるとは思っていなかったのか、あっけにとられ一瞬の沈黙。
「酒に強いんだな」
「え。あ、いえ、あなたと同じ物を飲んでみようかと思ったの。これ強いのかしら。よくわからないんだけど」
アルコールに対する無知さを示すその言葉とロックを作る手際が見事に噛み合わない。
だが、彼はその台詞を信じたのか、女の嘘を気にしないスタイルなのか相好を崩した。
「そうかそうか。これは甘みがあってうまいのだが、少し強いからな。

ゆっくり飲んだ方が良い」
「そうなんだ。ええ、気をつけつるわ」
そんな、２人のやりとりを知らぬげに静かにグラスの中で氷が砕け、涼やかな音を立てた。
「１０００万ニューエンの夜景か」
彼女はくすりと笑い、グラスを傾ける。
たわいもない会話が続き、アルコールはみるみるうちに減っていく。それに合わせるように男の自制心も減っていく。
「そろそろどうだ？」
いたずらっぽい笑み、蠱惑的とも、悪巧みをしているともいえる笑みを浮かべ、彼女は口を開く。
「そうねぇ。素敵なキスをしてから、あたしを生まれたままの姿にして貰えるなら、なんでもお願いを聞いてみたくなる気分ね」
男は待っていましたとばかりに、彼女の方に身を乗り出し、彼女もそれに応えるように細い両腕を男の首の後ろに回す。
瞬間、女性からアストラルの光が迸る。
通常の視野には映らない、魔法の光。
そして、男は地面に崩れ落ちる。くすりと笑い女が口を開く。
「惑乱、仕事よー・今からチップをあたしのコムリンクに差し込むわ」
女は、男のスーツからＩＤカードのような物を取り出し自分のコムリンクに読み込ませる。
そして、視野に浮かぶ何かをコピーするインジケータ。それが１００％になった時点でカードを元に戻す。
「あとはこいつベッドに転がして、あたしと良いことをした夢を見せるだけね。肉体労働って嫌いなんだけどなー」
彼女は男を引きずりベッドまで連れて行った。
時間を数日ほど遡る。
三宮の繁華街をジーパンにＴシャツという出で立ちのエルフの黒人女性が気楽に歩いている。彼女のコムリンクが呼び出し音を奏でる。着信相手はカオリ。馴染みのフィクサーだ。一瞬の逡巡の後コムリンクを取る。

「はい？」
瞬間、彼女の視界に黒髪を短く揃えた４０代前半の女性がポップアップされる。
「はい、ティター。元気？　実はさ、潜入工作の仕事があるんだけどやってみない？」
事無げに打診をする。彼女にとっていつもの仕事だ。その屈託のなさからは影の世界で２０年近くもフィクサーをやってきた人間には見えない。
ティターは自らのコンタクトレンズに投影されたカオリに対して、一瞬顔をしかめた後返答をする。
「ハッカーとメイジの２人組に仕事を振る以上あたし達向きの仕事なんでしょうね」
カオリは、ぱたぱたと手を振り、天気の話でもする気楽さで返事をする。
「ティター、あたしがやばい仕事回したこと合った？　長いつきあいなんだからもう少し信頼して欲しいわね。誰も彼も疑ってると小じわが増えるわよ」
ティターは鼻先で笑って答える。
「あたしには《ヘルシーグロウ》っていう便利な魔法使えるからね、あんたと違ってこじわは問題にならないのよ」
「で、どうするの」ティターの戯言をスルーして投げやりに尋ねるカオリ。
「オーケー。詳細を聞かせて」
「あたしは今回仲介だから依頼人と話して頂戴。ズーハイに6時でどう？」
「わかったわ。惑乱にも伝えておくわ」
「よろしく。こっちも依頼人に行くように伝えておくわ」
そう言うと、ティターの視界からカオリの姿が消える。
「やれやれ。仕事はいつも唐突ね。さてと、惑乱に連絡をして、と」
彼女はそんなことを呟きながら相棒のハッカーである惑乱へとコールを行った。

三宮エリアの外れにあるチャイニーズレストラン「ズーハイ」。隠れた名店と呼ばれるのにふさわしい店で。お手軽価格で本格中華が売りの店だ。

もちろんこんなご時世だ、天然素材はほとんど手に入らない。しかし、大豆ベース食品の使用によって高カロリーな中華がヘルシーになったと、逆に人気すら出ている。

そして、この店の大きな特徴は店内に監視カメラがないのだ。お客様に快適な食事をという店主の好みを反映した物だが、その結果、ティター達のような表沙汰にできない仕事をする物達が頻繁に会合に使うようになった。

約束の時間より少し早く、ティターが店に着くと顔なじみの店主が愛想良く声をかける。

「ティターさん、お連れさんは上にきてるよ」

「ありがとう。じゃあ、適当に始めちゃって」

そう伝えると、彼女は軽やかに2階へと上がる。

2階には仕事帰りでリラックスしたさらりーまんが群れる中、強ばった笑みを浮かべた男性がビールをちびちびとやっている。

「鈴木さん？」

一瞬の間。ビールを飲んでいた男が振り返り小首を傾げる。

「カオリから紹介を受けたものです。隣よろしいですかね」

鈴木はティターの尖った耳に目をとめながら不自然に微笑む。

「どうぞ。何か飲まれますか」

明らかな社交辞令。ティターの中で評価が確定する。

「そうですね、では台湾ビールを」

微笑みと共にオーダー。ここの支払いは依頼主が持つ。もちろん嫌がらせだ。

世間話もなく鈴木が仕事の話に入る。

「宮前電算という企業をご存じですかね」

記憶にはない。しかし即座に視界に宮前電算の情報がポップアップされる。相棒

のハッカーである惑乱の仕業だろう。

「確かミツハマ系のシステム設計の企業でしたかね」
たった今確認した情報をさも知っていたかのように話す。
目を見開く鈴木。知らないと思っていたのだろう。
「でしたら話が早い。そこの中央研究所の端末に無線送信ユニットを取り付けてきて頂きたいのです」
可愛く首をかしげ、先を促すティター。
「こちらの中央研究所は、完全オフライン環境でしてね。所員のコムリンクまで入り口で預けさせる徹底ぶり。データの持ち出しようもないと言う研究所なのです」
「つまり、枝をつけてこいって事かしら」
「その通りです。報酬は２０００ニューエンお支払いいたします。この研究所は認証こそ厄介ですが物理的な警備は神戸市警に委任している状態です。そう危険はないでしょう」
一瞬の黙考。視界の隅には惑乱からのＯＫサインと、鈴木さんのプロフィール。恐らく鈴木のコムリンクをハッキングして引き出したのだろう。
鈴木さんの本名は高橋昌美。宮前電算の中堅社員。ということはこのビズは社内の内紛絡みか転職のための資料集め。
「オーケー。お引き受けいたしましょう。我々が枝をつける、あなたが報酬を払う。それでよろしいですかね」
「そう言ってもらえると助かる。では、詳細を詰めようじゃないか」
手を挙げ制すティター。周囲を警戒する鈴木。
「あ、いえ、とりあえず、何か食べながら話しませんかね」
相好を崩しうなずく。ティターがコムリンク経由で連絡をすると下からチャイナドレスを着たウェイトレスが鳥の唐揚げ、エビマヨ、バンバンジーと次々に持ってくる。
料理が落ち着いた時点で再度ティターが口を開く。
「付帯条件があるんですかね」
「２点ある。１点は柏木という男の使用しているコムリンクに通信ポートを取り付けて欲しい。もう１点は君が不正に侵入した痕跡を残さないで貰いたい」

眉をひそめるティター。
「それは難易度が跳ね上がりますね。不正侵入の痕跡は丁寧に調べられれば隠しきれる物ではありませんよ。ましてや完全オフラインとなるとなおさらです。ましてや下調べを考えると２０００では少々安すぎるように感じられますがね」
鈴木は鷹揚に頷き口を開く。
「君の言うとおりだ。しかし、策があるのだよ」
「策？」
「そう。実は明後日から3日間、柏木が休暇を取っている。奴は無趣味な男でね。大抵の休日はデートクラブで相手を見つけて、神戸散策をしている」
ティターの視界にポップアップ、鴨が葱をしょって行進する画像。ティターは露骨にイヤそうな顔をしている。嘆息。
「つまり、柏木さんとあたしがデートをして、入門用ＩＤを入手。彼のデート中にチームの者が柏木さんに成りすまして研究所に侵入するということですかね」
イヤそうな表情になぞ気づかぬげに、あるいはエルフの表情など気にする必要がないと思っているのか、楽しげに鈴木が返事をする。
「その通りだ。幸い彼はエルフフェチでね。君なら適任だよ」
「それで行くと、私は侵入中部屋で柏木さんと運動していないと行けないのかしら」
残念そうな鈴木の返答。
「いや、それには及ばない。当日三宮の北野地区で監視システムの一時メンテナンスがあるのでね。その際に偶然柏木の映った映像が消えることもあるだろう」
「わかりました。お引き受けるとお伝えいたしましたし、やらせていただきます。ですが、付帯条件があまりにも多いように見受けられますので、報酬を３０００頂けませんかね」
一瞬視線を泳がせる鈴木。コムリンクで予算を確認したのだろう。
「残念だが、その金額なら他を当たらせて貰おう。２４００で手を打たないかね」

ティターの視界では鴨ネギを黒人女性が絞め殺して貪り食うチビキャラのアニメが進行中だ。相棒は超乗り気らしい。
「仕方ありませんね。それでやらせていただきます」
「では、報告はカオリさん経由でお願いいたします」
片づいている、と言うよりは生活感が無い部屋の奥でかなりの身体改造を施したヒューマンの優男が有線で大型のコムリンクに接続している。
その傍らのソファーでだらけているティター。
ティターの相棒、惑乱のロフトだ。
「良かったの、こんな安い仕事引き受けて」
面倒くさそうに振り向く惑乱。
「構わないさ。面白そうだったしね。宮前電算は奇妙な会社なんだ。たいした商品を出しているわけでもないのに、がっちりしたセキュリティを張っている。一度覗いてみたくなるのが人情ってものだろう」
露骨にイヤそうな顔をするティター。
「くずみたいなヒューマニス野郎の仕事を安い金で引き受けた理由が好奇心ですって？　そんなに好奇心旺盛ならドラゴンの巣穴でも漁りに行けばいいのよ」
ティターの不機嫌さを楽しんでいるのか、笑いながらの応答。
「まだ死ぬのはごめんだね。それにそう考えているのは俺だけじゃない。以前別のランナーチームが機密奪取の仕事を受けて失敗しているらしい。しかも、全滅だのなんだのではなくて、穴が見つけられませんでした、ごめんなさいときたもんだ」
怪訝な表情のティター。正直機密奪取だけなら研究員を拉致し、ＩＤを偽造すればすむ話だ。
「入門にはＩＤ認証と指紋確認。外出する研究員には発信専用のＧＰＳ付きバイオメトリーが付いている。書き換えようにもばらせば機能停止、通信途絶があるとその研究員のＩＤは一時的に剥奪。入門時にコムリンクを受付に預けるがその時本人認証も行う。完璧だろう」
「ってことは、あたしもついカッとなってぶん殴ったりしたらまずいわけね」

笑いを深める惑乱。
「平手打ちぐらいなら構わないだろうが、物理攻撃魔法はまずいな。ただ、男が運動中に疲れて眠ってしまうのはありえるんじゃないかな」
「そうね。ベッドの上の運動で眠るのはあり得るわよね。で、翌朝本人が爽快に目覚めれば誰も問題にはしないと」
冷蔵庫からビールを取り出しプルトップをあけるティター。もちろん、惑乱の物だ。
「うんざりね。他に情報はないの」
「柏木は、研究所のプロジェクトリーダーの一人だ。偶然にも鈴木さんこと高橋は彼の部下の一人だな。偶然というのは恐ろしいね。そして、柏木は徹底的な分業制を敷く人物らしくプロジェクトの全容は柏木しか把握していない。恐らく高橋を籠絡した企業の奴は落胆した後激怒したことだろうな。まさか、中堅リサーチャーがプロジェクトの概要すら理解していないとは思うまい」
一本目のビールを空け2本目に手を出すティター。
「そこで、慌てて自腹を切ってランナーを雇ったと。馬鹿みたいな話ね」
「そうだな。ま、仕事は仕事だ。とりあえず侵入用ＩＤとは別にコムリンクのアクセスコードが分かれば助かる」
酒の肴を探しながらティターが口を開く。
「聞き出せるわけ無いじゃないの。相手のコムリンクにつないであげるから適当に探りなさいよ」
肩をすくめる惑乱。最初からそのつもりだったのだろう。
「オーケー、なら段取り確認といこうじゃないか」
「スキミングをしてあたしのコムリンクを柏木のコムリンクに繋げば完了かしら」
「第一段階はな」
柿ピーをあけるティター。
「第二段階はあんたに幻影をかぶせて送り出すってとこかしらね」
「そうだな。そして最悪の第三段階。受付嬢が覚醒者だったらおれの

正体がばれてカウボーイ真っ青なガンファイトを展開する」
やる気なさそうに柿ピーつまむ二人。
「じゃあ第四段階は私が悪いハッカーに騙されたと涙ながらに訴えるというところね」
嘆息。
「普通の研究所なら考えるまでもないが。今回は何とも言えんしな。なんとか確認取れないか」
「先輩のこと言ってるの？たぶん情報は握ってるでしょうけど、あの人取り立て厳しいわよ」
肩をすくめ嫌そうな顔をする。
「アレスの諜報部課長に借りを作る気はないさ。必要なデータを拾ってくればいいだろう」
指を鳴らしながら嫌そうにコムリンクを操作するティター。
「あの人のことだからまだ働いてるはずだけど」
数回のコール。その後視界に３０代後半の黒人ヒューマン女性がポップアップ。
「あらティター、この魔力も持たない未開人に何か御用かしら」
深みがありよく響く声。
「先輩は覚醒しなくてもコーポレートマジックが使えるじゃないですか。この上魔力まで持ったら世の破滅ですよ」
いつものジョークなのか互いに口調が軽い。
「破滅させたいものね」
「それで地球にアレスのロゴを刻むんですね」
「失礼ね。私は慎み深いから地球＝アレスになるだけで我慢するわよ」
しばらく発作のような笑い。
「で、用件は何？」
刃を秘めた口調。仕事モードというところか。
「実は今度ミツハマ系の宮前電算に遊びにいくんですがマジカルセキュリティについて教えてもらえませんか」
こちらは変わらずお気楽口調。

「そうね」
一瞬の間。自身のコムリンクにアクセスしているのだろう。
「アストラル捕食バクテリアと結界ぐらいで常駐の覚醒者はいないはずよ」
「偵察に行かなくて良かった。あやうく喰われるところだったわ」
ニヤリと笑う先輩。
「あそこに柏木っていうプロジェクトリーダーがいるから彼が誰のために何をやってるか調べておいて。最低でも４０００は出すわ」
満面の笑みのティター。
「さすが先輩。愛してますよ」
「エルフは嫌いだから熨斗つけてお返しするわ」
耐えきれずに吹き出す先輩とティター。
「じゃ、人でなしはさくっと仕事してまた連絡しますね」
「ええ吉報を待ってるわ」
フェイドアウト。目を向けると呆れ顔の惑乱。
「どうしたの？」
「いや軽いなと思って」
「長年フォワードとバックスやってりゃあんなもんよ。とりあえずあたしが魔法でポカしなきゃ大丈夫ね」
うなずく惑乱。立ち上がるティター。
「もういくのか」
「だってこの部屋良い酒ないんだもん。リトル・フィートで飲み直すわ」
正面には空き缶の山。良い酒がではなく、酒がなくなったが正解のようだ。
空き缶の山をみて首を振る惑乱。
「わかった。じゃあ俺はもう一仕事しておこう」
「じゃあまた連絡するわ」
後ろ手に手を振りながらでていくティター。
「ふふ、あのアル中が。さてデートクラブをハックするかな」
ティターが柏木と熱い一夜を過ごした翌日、早朝。

ホテル近くに止めた車の中で打ち合わせをしているティターと惑乱。否、惑乱を鋭い視線で見つめるティター。その姿には普段のだらしない彼女の面影はない。
そして、彼女の指が乾いた音を立てると惑乱の外見が柏木の物へと変わる。
「お見事」
続けてティターが鋭い声をかける。
「水の精霊よ」
彼女の傍らに透き通った女性が光の鱗粉をまきながら顕現する。
「なによー、昼寝してたのにー」
ぶつくさと文句を言う精霊。比喩表現だろう。精霊は眠らない。
「彼にかかっている呪文《物理の仮面》を、彼が元の姿に戻してくれというまで固定して頂戴」
「やだ。固定って疲れるのよねー」
鋭い目を向けるティター。
「ふう、仕方ないわね。早めに解除してよね」
そう言った瞬間、ティターにかかっていた呪文を維持するために負荷がすっと消え去る。
「じゃあ、あとはよろしくね。あたしは部屋に戻るわ。ちょっち疲れたから二度寝する」
手を振り振りホテルへと消えていくティター。
三宮地区南部、宮前電算中央研究所。散歩のついでに寄りましたと言わんばかりの惑乱。さくさくっと入り口の認証をパスして研究所の中へ。怪訝な顔で迎える受付嬢。
「あれ、柏木さん。明日までお休みではないんですか」
社員が休日中に出勤して仕事をしているなどと言われると企業イメージに関わる。だから休みの日は休みの日らしく会社などには来るな、彼女の瞳がそう語っている。
惑乱は拝むようにして彼女に弁解する。
「実は今日行こうと思っていたテーマパークのチケットをデスクに間違っておいてきてしまってね。取ってきてすぐ戻るよ。見逃しても

らえないかな」
　くすりと笑う受付嬢。
「珍しいですね、テーマパークなんて。分かりました、早く戻ってください。私が怒られるんですから」
「いやぁ、恩に着るよ。すぐに戻る」
　コムリンクを受付嬢に預けて小走りで奥に向かう惑乱。
「デート相手の趣味かしら。柏木さんがテーマパークねぇ」
　くすくす笑いを続ける受付嬢。ついついコムリンクのチェックを忘れる受付嬢。
　無事奥のデスクに付いた惑乱。今日出勤しているスタッフも相当数いるが、全員コムリンク備え付けのディスプレイゴーグルで電脳世界しか見ていない。電子の早さで仕事をすれば仕事ははかどるが、防犯上はよろしくなさそうだ。
　仕事熱心な俸給奴隷の皆様のおかげで問題なく柏木のコムリンクに到達する惑乱。横には備え付けのディスプレイゴーグル。それを無視して自分の首のコネクターにケーブルをジャックイン。明らかに不自然な行動だが、脳内に埋め込まれたコムリンクにデータをコピーするには他に方法はない。
　一瞬の間。
　柏木のコムリンクの内容から推測したパスワードであっていたらしく、無事にシステムへとアクセス。
　プロジェクト詳細とクライアントとのメールのやりとりをさくさくっとコピー。ざくっと検索をかけると「構想（提出前）」というフォルダがあったのでそれもさくっとコピー。
　ついでにプロジェクトリーダー権限で高橋のコムリンクからメールをコピー。あの迂闊さなら面白い情報がある可能性もある。
　この辺で3分経過。怪しまれないためにもジャックアウトしてコムリンクに高橋から預けられた端末を差し込む。そのまま小走りで戻っていく惑乱。
　今現在オールグリーン。警備が強化された気配もなければ、鉄格子が落ちてくる音もしない。

向こうから警備スタッフが歩いてくるが、小走りを維持したまま魔法の言葉を呟く。
「お疲れ様です」
警備スタッフもにこやかに言葉を返し素通り。受付嬢からコムリンクを受け取り脱出。
受付嬢のあのにやけ具合からして柏木がテーマパークに行ったと広がるのに時間はかからなさそうだ。
外に出て、人目に付かないエリアで呪文を解除。併せてカオリにコール。
「はーい、カオリでーす」
すぐに反応がある。
「仕事終了だ。鈴木さんにギャラを振り込むように連絡してくれ」
視線を泳がせるカオリ。
「ほい、お疲れさん。鈴木さんには連絡しておいたわ。確認次第振り込むって」
すぐに振り込み連絡。そう言えば先ほど鈴木も作業をしていた。
「ついでに、ティターにも連絡してやるか」
その日の翌日。惑乱のロフト。深夜。
「おつかれさーん」
勝手知ったる何とやらで、ティターが勝手に入ってくる。
惑乱も慣れたもので片手をあげて対応。
「最後まで怪しまれずＯＬのふりはできたか」
「たぶんね。今のところ神戸市警もミツハマのセキュリティースタッフも駆けつけてきてないわ」
惑乱は振り向き、ティターが小脇に抱えている木箱に目をとめる。
「ああ、先輩が報酬とは別に送ってくれたのよ。天然物の２０２０年物のナポレオンよ」
嫌そうな顔をする惑乱。
「なんでだ？」
不思議そうなティター。
「お礼だってさ。あと、カードが入ってたわ。お決まりの健康を祈る

みたいな」
　カードを受け取る惑乱。
「どこがお決まりだ。あなた方の優秀な腕に祝福を。今後の生存を祈ってこれを送ります、って書いてるぞ。どこの世界にお決まりの文句で〝生存〟なんて言葉を使うんだ」
「えーと。データ確認した？　きっとあれ絡みだとは思うんだけど」
　ざっとデータを走らせる惑乱。横で付いたままになっているホロビジョンにニュースが流れる。よくある交通事故のニュースだ。２人は気にかけない。
「ミツハマとも直接は関係ないヤクザ系のコープだな。まあ、ミツハマの子会社ならパイプがあっても何もおかしくないが」
　ニュースが型どおりの文句を並べる。
「それって、ヤクザの黒幕がミツハマにも詳細は伏せておきたいようなプロジェクトの一部を走らせてるとかじゃないわよね」
「その酒が気まぐれでなければその可能性は否定できないな」
「腹を据えて飲みましょうか。合成物だけど生ハムも買ってきたし」
　遠い目をする惑乱。
「そうだな。考えても仕方ないしな。英気を養うか」
　どっかりと座り。グラスに貴重な酒をそそぎあける。ひとまずは今回のミッションの成功を祈って。
　その横では、変わらずニュースが流れている。
「今日の夜半、宮前電算の高橋さんが暴走したヴィークルにはねられ死亡しました。神戸市警は彼が自らの違反をごまかすためにシステムへのハッキングを試みた結果の暴走と発表しており、今後はセキュリティーの強化と哀悼の意を表明しております。

# 龍と人の不幸な関係

２０７０年　日本帝国　富士山直下

静かに風は吹き抜けてゆく。その音はまるで聞くものが無いことを悲しむかのように物悲しく甲高い。

富士の風穴の奥深く。未だ人類が到達せざる未知の領域。全ての科学的調査を拒み、ただ静かにそこにあり続ける。風が吹き抜け、水滴が落ち、小さな虫たちがはい回る。今日と明日、否、今年と翌年、そんな区別さえ無意味に感じられる洞窟の奥。自然の音のみが鳴り響き続けるかに見えた。

その場所で巨大な何かが身をもたげた。

爛々と輝くエメラルドグリーンの瞳が開き、周囲に怒りに満ちた思念をまき散らす。

それまで、無意味に動き続けていた虫たちが逃げ散る。

「タケルよ、疾く馳せ参じよ」

しばしの静寂。風すら遠慮したかのように吹かぬ。羽ばたきの音が響き、巨体の前に壮年のヒューマン男性が忽然と姿を現す。

「お呼びでしょうか」

男性が声をかける。巨体はただ思念を送らせる。

「美香が討たれた」

驚愕。そして、怒り。男の表情に次々とそのような感情が表れる。

「姉上様が・・・・・・そんな」

「高位のイニシエイトが正体を見破り、罠に追い込んだようだ。あの者は擬態術を好まなかった故にな」

惜しむような、嘲るような思念を放つ。

「私めに姉上様の敵を御討たせください。無様なまねはいたしません」

巨体より怒りの気配が迸る。

「愚か者め。高位のイニシエイトが相手では、おぬしも美香の二の舞になるのが関の山よ」

「しかし！」

「若き者達を使え。調べ上げ追い込むのだ。自らの愚かさを思い知らせよ。最後の介入は許す」
跪き、言葉を返す男。
「ありがとうございます。それでは、直ちに手配を行います」
踵を返す。そして、筋肉が膨張するような独特の音。
「龍牙の刀の奪還を最優先せよ。ゆめゆめ油断するな、奴らはティルラーンの魔導書を手に入れている節もある」
「御意」
そして、羽ばたき音。洞穴には再び静寂が戻り、エメラルドの瞳が静かに閉じられる。
２０７０年ＪＩＳ　神戸スプロール　西神地区
このエリアはかつて魔法企業がひしめき合い業界の未来を担おうとせめぎあっていた。
全てが過去形となってしまったのは日本帝国全土を揺るがした震災の為である。
現在では震災の原因の一つとして龍脈への干渉があげられている。
この地区は龍脈に干渉することで魔法企業を誘致していたのだ。無事ですむはずがない。しかし、その後の災害の拡大を防いだのも人の力だった。震災の直後に近隣の魔術師が集結し龍脈を鎮め荒れ狂う魔力の歪みにより狂った精霊を送還し続けた。
その結果、現在の西神地区は多くの魔術師が集うエリアとなっている。
そんなエリアにある一軒のタリスモンガー、魔法専門のフィクサー、の店，銀猫屋，にて、褐色の肌を持つエルフ女性が何かを悩んでいる。
「さっさと決めちまいな、ティター。そんな掘り出し物そうそうでないぜ」
店主とおぼしき老爺ががなる。
眉間に皺を寄せティターがぽそりとつぶやく。
「あと３０００安くなんない？」
「なるか、馬鹿野郎！ただでさえ相場より安いんだぞ」

３０００と言えば庶民3ヶ月分の生活費だ。安くなるわけがない。
「仕方ないじゃない。でないんだから！」
逆ギレをしてみても下がらないものは下がらない。
店主も負けじと怒鳴り返す。
「お得意さんだと思って下手に出てりゃ図に乗りやがって。ないならとっとと帰んな」
子供のように頬を膨らませながらティターは憤然と店を飛び出した。
そんな時にティターのコムリンクが着信を告げる。相手は山口組の若頭、三宅・満だ。
「おう、ティターか。仕事を頼まれてくれないか」
三宅は厳めしい顔に柔和な笑みを浮かべ話し始めた。
「うちの組の仕事じゃないんだかな、色々借りがある御仁でな。払いは保証する」
一瞬の黙思。ティターが満面の笑みを浮かべ口を開く。
「やるわ。詳細を教えて頂戴」
三宅は何かいいかけ、口を閉ざす。そして再度口を開く。
「依頼人は今西神の駅に向かっている。虎山という男だ。ついたらお前のコムリンクに連絡をいれさせる」
「わかったわ。駅前で時間をつぶしておくわ」
その後ティターが銀猫屋で収束具の取り置きを依頼したことは言うまでもない。
ティターが駅に着くと同時にコムリンクに通信が入る。
コムリンクに映るのは精悍な３０代中盤の日本人。
「ティターさんですね。虎山です。今駅に着いたのですが」
「では、駅前のカフェででも、お話を伺いましょうか」
場面変わって、合成コーヒーを前に向かい合う2人。
「お忙しいところすいません」
虎山は厳つい顔に似合わず穏やかに話を始める。
惑乱から虎山の情報がティターの視界の隅にポップアップされる。
それによれば虎山が山口組どころかやくざ関係者ではないと記載

される。
「いえ、お仕事を頂けて文句をいう謂われはございませんわ」
　銀猫屋でむくれていたエルフと同一人物とは思えない程優雅に微笑む。
「しかし、私どもをご指定ということでしたが、以前お会いしたことがございましたか」
「いえ、私の上司がスマートな仕事をするチームだと聞いたようでして。ぜひティターさんに依頼するようにと指示を受けておりました」
　虎山も落ち着いた笑みを浮かべ返す。
　この神戸でメタヒューマンに対して自然体を崩さない者はなかなかに珍しい。
　好悪いずれにせよ。
「そう誉められてしまいますとお断りできませんね」
　端から断る気のない女がそんなことを言う。
「そういっていただけると助かります」
　虎山は穏やかに微笑んだまま続ける。
「ＤＩＶＥと呼ばれる組織をご存じですかね」
　すかさず、ティターの視界にポップアップ。
【ドラコニック・インフォメーション・ヴァーチャル・エクスチェンジ】
　ネットワーク上でドラゴンの情報を交換し合うネットコミュニティ。世界中に散らばる数千の会員により構成される。明らかになっているドラゴンの動向やドラゴンの動画収集なども行われている。
「いわゆる、ワームウオッチャーのサークルでしたかね」
　一瞬虎山の笑みが強ばる。
　しかし、彼は即座にこわばりをほぐし言葉を返す。
「おっしゃるとおりです。ここに加盟している者から龍牙の刀と呼ばれる武器収束具を確　保していただきたい」
　不思議そうな表情で問うティター。
「それは見ればわかるのですかね」
　武器収束具など作り手の趣味でどうとでも作ることができる。

「芸術品としても収束具としても類を見ないものですので見ればわかるとは思います。念のため画像とオーラの特徴をお伝えしておきましょう」
　外見は飾り気のない無銘の刀。だか、その刃紋、反りいわゆる全体のバランスが絶妙なのだ。
　添付資料にあるオーラは奇妙なものだ。まるで本質を隠すように複数のオーラが襞のようになり全体を覆っている。
「なるほど、なかなかに珍しいもののようですね」
　その言葉に虎山がさも嬉しそうに笑いうなずく。
「私の主人が精魂込めて作り上げた一品でして」
「そうでしょうね、なかなかあるものではありませんね」
「ええ」
　虎山は続けて口を開き掛けたが、一度口をつぐみ表情を引き締める。
「とんだ脱線を。報酬は１０万ニューエン。期限は切りませんが急ぎです。最悪ご依頼を打ち切らせて頂く可能性もあります」
　ティターの頬がひきつる。破格の報酬である。普通の武器収束具なら2本は買える。
　格別なリスクも見あたらない。
　そして虎山が相場を知らないとも思えない。
　つまりは想定不能なリスクがあるのだ。
「今までのお話と報酬が釣り合わないよう聞こえるのですが」
　教えてくれればめっけもんとばかりに聞いてみる。
「ああ、申し忘れておりました。龍牙の刀を保持しているのは高位のイニシエイションを行ったアデプトと魔術師のようです。あとは刀を流されないようにとの保険ですよ」
　無理矢理優雅な笑みを浮かべるティター。
「承りました。早急に結果をだせるよう努力させていただきます」
「では、よろしくお願いいたします」
　ふと思い出したようにティターが続ける。
「あと、富士の御大にもよろしくお伝えください。すばらしいご依頼

ありがとうございました、と」
虎山はその言葉にハ虫類じみた酷薄な笑みを浮かべうなずく。
「ええ、もちろんですよ」
「とりあえず、やり合うには頭数が必要よね」
場所は惑乱のロフト。ティターがぽつりとつぶやく。
「覚醒者で固めるよりは物理火力で圧倒する方が安全よね」
独り言のようにぶつぶつとつぶやく。
惑乱は我関せずにマトリックスから情報を集めている。
「聞いてんの！」
返事のないことに業をいやしたティターが怒鳴る。
「聞いてるさ。魔法関係はお前さんの専門だろ。素人はプロの意見に従うさ」
さも心外だとばかりの惑乱。
「じゃあ静（セイ）に声をかけるわね。物理火力も交渉能力もあるし」
返事も聞かずにコール。
数回のコールで相手が出る。相手は整った顔立ちのエルフ女性だ。その顔はさながら北欧のエルフ。白石のような肌に黄金を溶かし込んだような髪の毛。
「は～い。どうしました～？」
コムリンクから間延びした声が響く。これでも彼女は重度のサイバー化を行ったサムライだ。
「ちょいと厄介なランを引き受けてさ。手貸してくんないかな、と思って」
静は寝ぼけたような顔をして返事をする。
「時間はありますよ～。ただ私で役に立つかと、いくらもらえるかですね～」
その流れるような抑揚を気にせずティターは続ける
「報酬は3万。想定される相手は高位のイニシエーションを行ったアデプトとメイジ。目的は武器収束具の奪還」
どうだとばかりにティターが胸を張る。
「いいですよ～。詳細をくださいな。あたしも相手を洗いますよ～」

３時のお茶に誘われた気楽さで応じる静。
ティターもなれているのか特にそこには触れない。
返事に応じるように惑乱がデータを転送する。
「ふ～ん。依頼人もターゲットもやばいですね～。で、私はどうしたらいいですかね～」
「とりあえずターゲットを絞らないと話になんないからさ、影の業界で派手に動いてる人洗ってくれないかしら。あたしは銀猫屋の爺さんに該当するイニシエイトを聞いてみるわ。それで消し込みましょう」
静はにこりと笑いうなづく。
「おっけ～。じゃあ情報は惑乱に集積ね」
二人の視界にＯＫの文字が。
かくして二人は神戸の街に飛び出した。
神戸スプロール　元町エリア
ＪＩＳらしくない中華風の町並み、中華街をクロームのエルフが買い食いをしながら歩く。中華風の合成素材から魔法の触媒まで揃わないものはないと言われるエリアだ。
このエリアで顔の利く勢力に聞き込み、というわけではなく、馴染みのフィクサーカオリに飲茶をおごりつつ情報を聞くのが目的だ。
カオリも今日は暇なのか二つ返事で呼び出しに応じた。
場所は怪しげなカンフーグッズを販売する土産物屋の二階の飲茶屋、好菜（ハオサイ）だ。
この時代には珍しく天然素材を駆使した飲茶を出す。価格はおしてしるべしだ。
飲茶をオーダーして一口茶をすすってからカオリが口を開く。
「で、何が知りたいのかしら？」
静が一瞬沈黙し厨房に目を向け、嘆息。
「最近派手に動き回ってるメイジとアデプトの二人組を探してるんだけど知らないかな～？」
「優秀な？」
お茶を注ぎながらカオリが問う。

「そう、優秀な」
そこに店員が色とりどりの飲茶を持ってくる。
しばしの沈黙。そして、しばらく舌鼓と料理の感想だけが飛び交う。
３０分ほど経過し卓上には湯気を上げるだけの空の籠のみとなる。
「御剣姉妹ね」
ふと思い出したようにカオリが呟く。
「そうかぁ。当たってみる」
話に断裂など無いかのように静は答え、コムリンクを操作する。そうデザートを注文するために。
所変わって西神地区、銀猫堂。
「爺さん、お金できたわよ。例の収束具頂戴」
開口一番ティターが店主に声をかける。
「お、おう。本当に金できたのか。早いな。念のため先に残高確認させて貰うよ」
ティターは今思い出したとばかりに指をならして付け加える。
「値段だけど正札でいいわよ」
嫌そうな顔をしながら残高照会をする店主。
「何が知りたい？」
ティターは否定するようにぱたぱたと手を振り答える。
「やーね。たんなる日頃の感謝のつもりだったんだけど」
一瞬の間。相手の返答を待たずに続けるティター。
「まあ、そこまで言ってくれるなら教えて頂戴」
不機嫌そうな顔で続きを待つ老爺。
「ドラゴンに詳しい魔術師を誰か知らないかしら。ちょっとしたビズで絡んじゃってね」
何かを天秤に掛けるような顔での黙考。
まるで気に掛けぬげにティターは店内を見て回る。
「爺さん、ついでにこれも貰うわ」
にこやかに追加の購入を決めるティター。
「御剣だな。深剣・冴恵（ミツルギサエ）が恐らくこの辺りでドラゴン

については一番詳しいはずだ」
渋々といった感じで老爺は口を開く。
ティターは我関せず愛想良く応じる
「ああ、やっぱり彼女よね。サンキュー。連絡取ってみるわ」
ティターは機嫌良く物品を購入し、店を後にした。
後には苦み走った顔をした老爺が残され、ぽつりと呟いた。
「あれほど気をつけろと言ったのに地雷を踏んだようだな」
彼は特に誰かに連絡をするでもなく帳簿の整理を始めた。
惑乱は、ＤＩＶＥについて色々とネタをあさっていると黒い噂が色々と出てきた。
曰く、いくつかのドラゴン謀殺事件にこの組織が絡んでいる。
曰く、裏サイトにはドラゴンのスナップムービーがアップされている。
曰く、古代の邪教、偉大なる狩人の教団が管理を行っている。
半分は眉唾にしても全てがうそとも思えない。
管理者権限を獲得し、アクセス履歴をみると隠しエリアが存在するのは間違いないらしい。
その隠しエリアに何かしらのヒントがあるのだろう。
惑乱は神戸の近隣からアクセスし、なおかつ裏のサイトへ入る者を洗い出し始めた。
決して多いはずはない。
徐々に無数の容疑者が絞り込まれていく。
あわせて静とティターの聞いた深剣姉妹の立ち回り先から活動拠点を洗う。
特別なことはなくただひたすらに同じことを根気よく繰り返す。
そんな時、二人の帰宅を告げるアイコンが明滅する。
しばし後、惑乱は意識の中で伸びをしてログアウト。
そして、物理的に伸びをして強ばった体をほぐす。
振り向けば静とティターがうまそうに杏仁豆腐をつついている。
「お疲れさん。やさ割れた？」
気楽に尋ねるティターの耳には見慣れぬ赤い宝石のついたピアス

が、長い髪には妖精の装飾が施されたバレッタが座を占めている。
一方静は満腹時特有の満ち足りた顔。ほんのりと飲茶の薫り。
「何やってきたんだ、おまえ等」
「アクセサリーの調達」
「優雅に飲茶ランチを少々～」
憮然と問う惑乱に楽しげに返すお嬢様方。
「で、わかったんですか？」
「とりあえず長田の方とだけな」
「オッケー。じゃあ後は足で探して強襲しましょう」
かくして三人は長田地区を目指し家を出た。
神戸スプロール　長田地区
この辺りは元々下町と呼ぶにふさわしいエリアだった。定食屋に居酒屋、そして町工場。
１９００年代に海岸沿いに川崎重工や三菱重工業といったかつて日本を代表した重工企業が軒を連ねていた。
だが先年にあった大震災により軒並み壊滅。すでにドイツのメッサーシュミッツに買収されていた川崎はあっさりと長田地区を見捨てた。
また、再建を目指しながらも、すでに力を失い小松に買収される身となった三菱には再建を主張する権限はなかった。
そして、多くの企業がこのエリアを見捨てたことで再建予定であった企業も予定を永遠の予定のままとした。
その結果巨大工場は放置され、ストリートギャング達の格好のアジトとなった。
まさに守りやすく攻めにくい要害である。
缶ビールを下げてうろつく三人。声をかけるのは静の仕事だ。
サイバーウェアで強化されたフェロモンと、独特の柔らかな言いまわし、そしてビール。
大体の相手は知っていることをついつい話しすぎてしまう。
そんなこんなで、長田のスクワッターに静のファンが相当数出来上がった辺りで深剣姉妹の住処はあきらかになった。

長田南部の旧化学品メーカーの社屋だ。近所のストリートギャング、ヴァイパーズを護衛に雇っているらしい。
ティターがアストラルから見ると社屋には薄い膜のようなもので覆われている。
結界である。これではアストラルから潜入はリスクが高い。
そんなことをつらつらとティターが考えている間に、惑乱がマトリックスから電子セキュリティーを掌握する。
ヴァイパーズは入り口に二人、警備室に二人の計四人、深剣姉妹は昔の社長室にいるようだ。
警備室のカメラはエンドレスに回しておけば気づかれないだろう。
今回は惑乱にもガンナーとして働いてもらう以上、これ以上ハッカーとしてのバックアップが期待できない。
ティターが、自らを加速する呪文を唱え腕輪によって維持をする。
そして、バレットとペンダントを持ち、意思を込めると一瞬のほのかな燐光を放つ。
突入である。
入り口の二人はティターの範囲魔法で悲鳴を上げるまもなく無力化される。
そして、3人は一路深剣姉妹の元へと目指す。
実力で負けている以上、不意をつき瞬時にけりをつけなければ、不利なのはこちら。
その思いを胸に、かつて社長室として使われていた部屋へと突入する。
外に向いた大きな出窓、執務用の机、そして、面立ちの似た二人の女性が待ち構えていた。
恐らく、ウォッチャーか何かに監視をさせていたのだろう。
部屋に入った瞬間、剣を持った深剣・恵が神速の動きで惑乱に近接し大上段に切りぬく。
惑乱はその一撃で弾き飛ばされ、驚愕に目を見開き倒れ付す。
ティターと一瞬の目配せをした後、静は恵を無視し、魔法使いである冴恵にモノフィラメントウイップで切り掛かる。

その単分子の刃は冴恵を捕らえるものの不可視の障壁に阻まれ無力化するには至らない。
ティターは、自らの魔力の限界までマナをかき集め、一気に解き放つ。
その凶悪なまでのマナの本流が恵を内面から焼き払い弾き飛ばす。
だが、そのあまりにも膨大な魔力はティターの身をも焼き、全身にやけどとも内出血とも言えない不可思議な傷跡を残す。
冴恵の顔に勝利を確信した笑みを浮かべ呪文を解き放とうとした瞬間、出窓が外側から砕け散り、小型のドラゴンが冴恵に躍り掛かる。
その獰猛なまでのカギ爪の一撃を避ける術も、はじき返す力も残していなかった冴恵は、ただ引き裂かれ、ずたぼろのようになってはじき飛ぶ。
静がドラゴンに向かって身構えた瞬間、ドラゴンは笑いのような吐息を吐く。それと同時に二人の頭の中に声が響く。
「落ち着け。依頼人に剣を向けるか」
「と、虎山さん!?」
それは、間違いようもなく依頼人の虎山の声であった。
２０７１年　日本帝国　富士山直下
風穴の主である、グレートドラゴン竜冥（りゅうみょう）がエメラルドの瞳を開く。
それにあわせるように、目の前に一人の男が舞い降りる。虎山である。
「ただいま帰還いたしました」
言葉と同時にうやうやしく一振りの日本刀を差し出す。
「うまくいったようだな」
虎山は黙って頭をたれた。
「して、奴らはどうであった？」
「まずまずかと。御大にエルフの魔術師より、よき仕事をありがたく存じます、と感謝の言葉を預かっております」
その言葉を龍冥が聞いた瞬間、暴風と吼え声が風穴に吹き抜ける。
「愉快なものよな。これは今後も使ってやらねばなるまいな」

虎山は何も言葉を返さず、ただ頭をたれつづける。

# ストレイトオークワルツ

２０７７年、日本帝国、神戸スプロール

空は抜けるように高く、雲一つない。

世界的に大気汚染は進行しているはずだが、震災を期に精霊主導の復興を掲げメガコーポを抑えてきた成果か日本帝国の大気汚染は減少傾向にある。

もちろん、大気汚染を必要とせずに生産を進める技術が進歩したことも無縁ではない。

そんな気持ちの良い青空の下、黒檀色の肌をしたエルフが盛大な溜め息をついていた。

「残高やばいなぁ」

ＡＲに口座残高を表示して買い物の算段をしていたらしい。

強いウェーブのかかった漆黒の髪をすきながらそんなことを呟く。

「今月はとりあえず惑乱のところに転がりこむか、あるいは身体を売るか」

女性の顔立ちは整っており、その四肢は引き締まっている。

エルフにしてはメリハリのついた体型も含めだいたいは美人と認めるだろう。

服装も最新デザインのアーマージャケットに身を包み、両手首にはアンティークなアンクレットを着けている。

彼女の名前はティター。それなりに名の売れたストリートメイジである。

そんな彼女の景気が悪いのには理由がある。

彼女を特に信頼して仕事を回してくれていた前の職場の先輩と飲み仲間の景気が悪いのだ。

先輩はアレスのブラックオプチームを幾つか指揮する立場にあるジョンソンだが、今のアレスは状態が悪い。

数年前に出したリコールによるシェアの低下は深刻である。

そして、アレス創業者の息子であるアウレリウスジュニアの死は様々な分野での展開に暗い影を落としている。

挙げ句の果てにアレスが駆除を表明している昆虫精霊達も組織的な反抗に出ており対策費用も馬鹿にならない。
必然的にアレスからのランはリスクに対してリターンは減少してしまい、生活に対して影響が出ることになる。
飲み仲間は渡田連合系の山口組の若頭補佐だ。
２０７５年頃にかけて行われたドラゴン達の壮絶な内輪もめの影響を最も強く受けた組織の１つが三合会とヤクザだ。
中華連合に本拠地を置くグレートドラゴン嵐（ラン）と日本帝国に本拠地をおくグレートドラゴン竜冥（りゅうみょう）は第四世界から続く不倶戴天の仲である。
彼らは先の戦いでライバルの子飼い組織を叩き潰すように配下に激を飛ばした。
これにより世界中でヤクザと三合会の熾烈な抗争が展開されることになった。
神戸スプロールでも例外ではなくヤクザと三合会の抗争はあった。
ただ、土地柄ヤクザが圧倒的にアドバンテージを持ち抗争は激化しないかに見えた。
だが、このきな臭い状況を嗅ぎつけた神戸市警は間髪入れず手入れを大々的に行った。
この背景には嵐により提供された山口組の内部資料があったとも言われている。
これにより山口組の勢力も大きく殺がれ必然的に仕事はしょっぱいものか抜き差しならぬものに限定される。
ティターも名の売れたランナーである。不景気が一年ぐらいであればやり過ごしていく仕込みはしている。
しかし、それが3年以上続くとなるとなかなかに厳しい状態とならざるを得ない。
そんな苦労が先程の溜め息に込められていたわけだ。
決して１９６０年物のアイリッシュウイスキーに大枚をはたいたのが原因ではないと、ティターは自分への言い訳に決着をつける。
そんな自己欺瞞を行うティターの視界にオークの少年が道端で座

り込む姿が写り込む。
身なりは悪くない。
だが、纏う雰囲気は絶望と表現するのがふさわしい。
日本帝国のメタ差別は今生帝になりかなり緩和されたとは言え未だ根深い。
柄の悪いのに絡まれ警察も来ない。その可能性もある。
ティターは集中しアンクレットがオーラを放つ。一見何の変化もない。
そしてティターはおもむろに少年と目線を合わせ声をかける。
「何やってるの？」
少年の視点がティターにあう前の一瞬の間。
「・・・困ってる」
ティターはエルフ特有の長い耳を少し引っ張りながら呆れたように口を開く。
「そう見えるわ、確かに」
少年は話は終わったとばかりに口をつぐむ。
背後でシアワセ電鉄三ノ宮駅より吐き出された大量の乗客が歩き去っていく。
ティターは少し考えてから少年の手を取る。
少年は不思議そうな顔でその手を見つめる。
「お昼おごったげるから来なさいよ」
ティターは傍らにある１００％国産大豆と書かれた寿司屋に向けて顎をしゃくりながら少年を立たせる。
「でも」
逡巡する少年。普通に考えて詐欺か美人局だ。ついて行く方がおかしい。
「何かあると寝覚め悪いし。後暇だからお昼食べながら何で困ってるのか教えなさいよ」
意味もなく口をパクパクさせる少年。
「どうしょうもないから座り込んでたんでしょ。状況は変わらなくてもお昼代が浮くしいいじゃない」

ムチャクチャな理屈だと思いながら、少年はついていこうとしている自分に気づいた。
「じゃあ、ご馳走になります」
少年は悪魔は黒い肌で美人だと聞いたなとふと思いながらティターに手を引かれて歩き出した。
店内にはＡＲで「無添加１００％国産大豆」という言葉や大豆や魚のキャラクターが踊っている。
そして、ＡＲナビとしてそのキャラクターの一体が決まり文句を口にし席に案内する。
マトリックスプロトコルが刷新される以前はしばしばキャラクターが改竄されたり、いきなりトイレに案内されたりといったハッカーのイタズラもよくあったが最近はほとんど無くなった。
友人のハッカーに言わせると人生に潤いが無くなったらしいが、コムリンクの仕組みが今一つ理解できないティターからすると企業法廷の謳う人類のための新プロトコルと言う言葉を不覚にも信じかけてしまう。
席へ進み、ＡＲ上にポップアップした支払い承認を選択するとオーダーボックスがポップアップする。
「好き嫌いある？」
「え、あ、いえ、大丈夫です」
「じゃあ盛り合わせでいっか」
適当にオーダーを行うティター。
見かけ上は様々な食材を使用した寿司が卓上に並ぶ。
もちろん、全て大豆食品による合成食材だ。
無言で箸を進める二人。
ＡＲ上で虚ろに音楽が流れる。
ひとしきり食事をした後にティターが口を開く。
「で、何があったの？」
しばし、醤油皿を眺めた後にオーク少年は口を開く。
「両親が行方不明になりました。部屋も荒らされていなくて監視カメラに歩いて出て行く姿が映っていたから警察からは事件性はないと

言われました」
射抜くような目で少年を見ながらティターはただ話を聞く。
「でも自分から何も言わずに姿を隠すとか信じられなくて」
腕を組み黙考。
「探したげようか？」
不思議そうにティターを見上げる少年。
「見つかるか解んないけど探したげようか」
「お金無いですよ。」
ニヤリと笑うティター。それは義侠心から子供を助けようとしている慈母よりも獲物を見つけた肉食獣を彷彿とさせる笑みだ。
ビクリと震える少年。
「ただで良いわよ。暇だし」
スッと手を差し出す。
悪魔は魅力的な言葉で人を誘惑する。
そんなこと思いながら、少年はティターの手を取り告げた。
「ぜひ、よろしくお願いします」
「契約成立ね。じゃあ行きましょうか」
そして、ティターは勢い良く立ち上がった。
ＪＩＳ　神戸スプロール　三宮地区

オークの少年、竹田誠の家にやってきた二人。
住まいは三ノ宮近傍のマンションだ。
銃声がすれば5分で警察が飛んでくる高治安地区だ。
力付くで拉致するのは難しい。
室内に入りティターはじっとアストラルの痕跡を探す。
いかに隠蔽されても強い感情の残滓は残るものだ。
「恐怖かなぁ。でもヘッドケースでも恐怖はあるし」
横では誠がビルのシステムにアクセスし監視カメラのデータを呼び出す。
そして両親が映っている前後一時間を切り出してティターのコムリンクに送信する。

データを確認してコール。
「惑乱、ひまなら少し解析して頂戴。とりあえず、改竄されてるかだの確認だけでいいわ」
最近は人生に潤いがないとぼやく友人のハッカーだ。
「全く唐突だな」
ぼやきながらも律儀に解析を進める辺りに二人の関係性が垣間見える。
「うーん、いい仕事だが、改竄の痕跡はあるな。」
唇に指を当て考えこむティター。
「復元もできなくはないが、そいつは有料だ」
にべも無く言い放つ惑乱。
「多分大丈夫。必要になったらまたお願いするわ」
「あいよ。儲け話待ってるぜ」
矢継ぎ早に別の相手をコールするティター。
「はい、深山です」
相手は実直そうな刑事だ。
「おひさ。今いい？」
ティターは名乗りもしないがいつもなのか相手も気にしない。
「おう、どうした。仕事はないぞ」
「やーねー、市民の義務としてお巡りさんに教えたい事があるだけよ」
もちろん、彼女は税金など払っていない。
「まあ、聞くが、何も話せないかもしれないぞ」
悪戯っぽく笑うとティターは話し始める。
「今日三ノ宮駅近くに住むＯＲＣの幹部が自発的に姿を眩ましたらしいわ。
監視カメラの映像を見ると夢遊病のような足取りだからヘッドケース風の事件よね」
ヘッドケースとは最近流行している奇病ＣＦＤの罹患者を示すスラングだ。
別人格になり致命的な事故を起こしたり、心神喪失状態になったりする。

「ところがこのカメラの映像は改竄されていて、誰かがヘッドケースと見せかけて誘拐した疑いが出てきたわけ」
深山は話の流れに不穏な気配を感じる。
「このご時世だからＯＲＣの幹部が消えたら原理的なヒューマニスを疑うと思うけどその兆候がない」
ティターの目がさながら獲物をいたぶる猫のように輝く。
「もしかすると、これを放置すると愛する神戸市警が汚名を被ってしまうかもしれない。そう危惧してる訳よ。」
深山は頬をかき口を開く。
「つまり、担当したうちの刑事が誘拐に関与しているか、あえて証拠を見逃している可能性があると？」
我が意を得たりと笑みを深くするティター。
「可能性の話だけどね。今なら優秀なメイジが専任で裏取りできるけど、いかがかしら？」
腕を組み悩む深山。
「もちろん、必要なければ興味がありそうなＯＲＣに持ちかけるけど？」
つまらなさそうに耳を引っ張るティター。
深く息を吐く、深山。
「課長ですか？三ノ宮のヤマの件で。ええ個人的な友人が。オカルト探偵みたいな奴でして。５０００で大丈夫ですかね。ありがとうございます。で、５０００でどうだ？」
ティターはにやり。
「オカルト探偵がリサーチするには充分ね、リサーチするには」
深山は天を仰ぐ。
「危険手当ては別途つけるし、仮にもヘッドケースでも支払う。どうだ？」
「悪くないわね。すぐに対応するわ。一応担当の刑事の個人情報を頂戴」
何かを操作する深山。メールの到着をポップアップするティターのコムリンク。

「オッケー！　朗報を待って頂戴」
口笛を吹きそうな風情のティターに、ポカンとした顔の誠。
「えっと」
何が解らないのかも解らなければ状況も見えない、そんな顔だ。
「つまり、悪い奴とお巡りさんが仲間かもしれなくて、良いお巡りさんに手伝いを頼んだの」
誠に理解が広がる。
「時間の勝負だけど、ご両親助けれるかもしれないわよ」
ティターはニヤリと猛禽の　ように笑う。
ＪＩＳ　神戸スプロールシアワセ電鉄　岡本駅
三ノ宮が神戸スプロールのポ以上の治安が維持されている。
このために駅から降りるだけでＳＩＮ認証が必要になる。
ゆえにティターは駅の構内にあるショップでコーヒー片手にパンをかじっている。
待ち合わせだ。
本来はもう少しいい場所で打ち合わせをしたいが何せ今回は時間がない。
誠の両親が〝事故死〟するまえに蹴りをつけたい。
そんなことをつらつら考えながらメールを打っていたティターに声をかける男性が１人。
「ティター待たせたな」
慌てて立ち上がり満面の笑顔を浮かべるティター。
「忙しいところを無理言ってごめんなさいね。コーヒーでいいかしら」
かいがいしく準備をする。
「ああ、ありがとう、コーヒー貰うわ。」
コーヒーを受け取る男性。
男性の厚みのある肉体はスポーツ選手か格闘家を彷彿とさせる。
だがそれ以上に印象的なのは柔和な笑みを浮かべているにも関わらず底冷えするような瞳だ。
男性は神戸スプロール一帯を地盤とするヤクザ、山口組の若頭補佐

だ。
　山口組は渡田連合に連なるヤクザで任侠に比較的近しい昔ながらのヤクザだ。
「で、急な用事はなんや」
　うまそうにコーヒーをすすりながら尋ねる。
「ちょっとしたフッティングでヒューマニスを追ってるの」
「ヒューマニスなぁ。うちにも近い考え方のぎょうさんおるからな」
　ドーナツをパクリと食べる。見かけによらず甘党らしい。
「別に壊滅とかそういう話ではなく個人的な人助けです。一組の夫婦を助けたいだけでしてね」
「まあ、頼みぐらいは聞くわ。できることと、できんことあるけど」
　一枚の写真を出すティター。
「こちらは今回の件に関わっていらっしゃる神戸市警の・・・」
「永山さんやろ、よう知ってるわ。うちらと彼らは表裏に別れてるけどこの街を守るために動いとる。彼に迷惑かけることはできへんで」
「もちろんです。永山さんには今回の捜査で余計な疑いがかけられています。今のうちに旗幟をはっきりされた方が良いのではないかと思うのです」
　じっと目を見つめるティター。
「ティターに協力することによってか」
「もちろんご自身の手で蹴りをつけていただいても結構ですが大変かと思いますので」
　腕を組み目を閉じる。
「解った。話は進めよ。でも、えらい入れ込みようやな、フッティングって柄ちゃうやろ」
　苦笑いをしながらティターは告げる。
「誘拐されたご夫婦の息子さんが昔の自分に見えたんですよ。そしたら、ついね」
「可愛いとこあるやん。ええやろ本腰いれて手伝うわ」
「ありがとうございます。」

ＪＩＳ　神戸スプロール　北野地区

ヤクザの三原から程なくしてデータが届く。
大東亜共栄圏復興連合。それは今回の事件を担当していた刑事が深い繋がりのあるヒューマニス組織だ。
組織の構成員は自分たちはヒューマニスなどではなく往年の日本の栄光を取り返すために活動していると語るだろう。
だが、そのために穢れたメタヒューマンを排除し覇権政治を目指している。
覇権政治はロビー活動の領分だがメタヒューマン弾圧は簡単にできる。
結果的に日常的な活動はヒューマニスと大差がなくなる寸法だ。
その拠点が北野にある。
北のは大正時代の建築が未だに残る美観地区だ。
観光地であり高セキュリティー地区となる。銃声を響かせれば1分もすれば建物は包囲されるだろう。
神戸市警の深山から人員救助のための追加報酬をせしめ、ヤクザの三原経由で建物内部の構造とスパイダー権限まで手に入れている。
この施設には専任のスパイダーはおらず、警備はローンスターに外部委託をしている。
つまりは警報さえならさなければ警備員は飛んでこない。
ティターは呪文で反射神経を増幅させ、更に外見を呪文で日本人ヒューマンにする。
黒檀のような自慢の肌の色を変えるのは好みではないが贅沢は言えない。
自分の偽造ＳＩＮに会員のＩＤを発行し正面から堂々と侵入する。
警備員も関東のメンバーであるというカバーＩＤに疑いを持つこともなく問題なく侵入。
コンタクトに館内地図を投影しながら来慣れた顔で歩みを進める。
捕まっている場所が中核メンバーが関係していると当たりをつけ所在をマップにマークする。

最悪荒事も覚悟した上での侵入。
裏口から入れる部屋で幹部の入室ログのある部屋を目指す。
スパイダー権限を持つティターには鍵など意味をなさない。
目的の部屋には予想通りオークの男女が意識を失っていた。
精霊を呼び出し二人を運ばせる。
そして建物から出ればロボタクを捕まえすぐに病院を目指す。
その間に大東亜共栄圏復興連合のデータベースから抜き出した誘拐に関するデータを2人のコムリンクにコピーする。
この資料を手ぐすね引いて待っている神戸市警は直ちに捜査に乗り出し、組織を解散に追い込むことだろう。
誘拐された2人は自力で脱出したという形になる。
ランナーの介入などなかったわけだ。
少年は両親を失わずに済み、ティターは小銭を稼いだ。
これにて一件落着。三面記事を賑わすよくある事件に過ぎない。
ただまあ、翌月ティターは三ノ宮で誠に出会い感謝を雨霰とぶつけられて、あわつくことになるのだが。

# シアワセ大将軍の軍艦マーチ

２０７８年　ＪＩＳ　関西スプロール　神戸地区

神戸地区の中心である三ノ宮駅にほど近い歓楽街。

夜になれば人は溢れ煌めくこの街も昼間はどこか間の抜けた平穏さをたたえている。

人通りはあるが皆一様に自身の用事に追われるように慌ただしく歩みを進めている。

そんな中のんびりとした足取りで買い物袋を下げて歩くエルフが1人。

褐色の肌の女性でウェーブのかかった髪が特徴的な整った容姿のエルフ女性だ。

流行のデザインのアーマージャケットとアンティーク調のブレスレットのミスマッチはあるが、彼女の美しさは誰もが認めることだろう。

手にした袋に入るロゴは天然物の酒を扱う店のものだ。

浮かれた顔から察するに良い酒でも手に入れたのだろう。

その時路地裏から重い物が倒れる音が響いた。

音に釣られるように視線を向けるエルフ女性。

まず目に入ったのは足だ。

路地裏の表から見えない場所に倒れているらしい。

一瞬の逡巡。その後良い酒を手に入れてご機嫌だったせいか助けてやることにする。

集中し周囲のマナを操作する。自らの反射能力を増加し、仮に犯人がいても逃げる事ができるようにする。

そして、警戒をしながら無造作に路地裏に踏み込む。

そこは平穏な昼下がりの歓楽街とはかけ離れた空間だった。

そこにいたのは男性が４人。

３人は青年で地に伏し、１人は老人で壁に寄りかかり体を支えている。

否、もう1人老人の背後に３０代半ばに見える女性が呆然としてい

る。
単純に考えれば女性を守って老人が三人の暴漢と戦ったのだろう。
「だ、大将軍？」
エルフの女性が間の抜けた声を上げる。どうやら知己らしい。
その声に反応して老人はエルフに目を向ける。
「なんや、ティターやないか。ひさしいの。でも大将軍はやめてくれへんか、隠居した身や」
ナガヤマ・タカシと言うのが、この老人の名前だ。
かつてシアワセの精鋭部隊部隊である神の武士を指揮し、影の世界で畏怖と恐怖を一身に集めてきた男だ。
当時誰ともなく呼び始めた名前がシアワセ大将軍。
ティターもかつてアレスのブラックオプチームにいた頃は様々な伝説を耳にし、直接痛い目に合わせられたこともある。
すでに引退しシアワセのブラックオプのコーディネートをしていると聞いている。
そんな伝説の存在が今目の前で力無く横たわっているのだ。
「あー、ご健勝そうで何よりです。後身の指導ですか、実戦形式の」
そうであって欲しい切実さの滲む声だ。
「おい、おい、ティターよ。希望で口開いちゃフェイスとしておしまいだぜ。俺を殺せたら卒業とか、うちはどっかの忍軍かよ」
ティターの願望は無惨に打ち砕かれる。
そして、見ないようにしていたが、この老人はすでに瀕死だ。
極限まで埋め込まれたサイバーウェアにより呪文を阻害されることを考えれば、治療呪文は期待できない。
シアワセの大物が辻強盗にやられたとは考えにくい。
仮にやられてもこんな街中だ。彼が契約している救急医療サービスが駆けつけ考え得る限り最高の治療を施すことだろう。本来であれば。
しかし、今この時点で救急車のサイレン音は響いてこない。
妨害が入っているか、ナガヤマが呼ばないようにしているかだろう。

それだけの影響力を行使できるのはどこかのメガコーポだろう。
メガ同士のシャドウウォーに巻き込まれ、しかもシアワセの大物が殺害される程シアワセを追い込めるのは他の１０大メガコーポぐらいしか考えられない。
ティターが虎の尾を踏んだかと冷や汗をかいていると、ナガヤマがメモリースティックのようなものを投げ渡した。
支払い保証済みのクレッドスティックだ。
「そんなやばい話しじゃないから、手伝ってくれ。３０万入っている」
呆然と目を開き、ついスティックを受け取る。
プロのランナーとしてあるまじき失態。
「お前が考えてる程やばい話しじゃない」
ナガヤマが同じ言葉を繰り返す。
「娘がＣＦＤになっちまってな」
横で無感動に立ち尽くす女性を指差す。
「知ってるかも知らんが、今シアワセの取締役にいかれた野郎がいる。」
キムラ・ナオヒコ。シアワセのＣＥＯシアワセ・タダシの隠し子とも噂される神道の神官だ。
対外的には今生帝に絶大な影響力のある神道教会との関係を強化するために神道教会を取締役に加えた。その神社の責任者が彼なのだ。
「そいつがＣＦＤに罹患したら魂の死だ。肉体は社に献体しろと言っていてな」
ＣＦＯ、記憶喪失を含む人格改変を起こす病気だ。
実際にはＡＩがメタヒューマンの肉体に自らをダウンロードする際に起きている事象だと言われている。
この際インプラントされたナノマシンにより本来の自我は〝フォーマット〟されるため、魂の死であると言う主張もあながち間違いではない。
更に言えば、中に入ったＡＩも、だいたいはダウンロードの際に機能障害を起こしている。

切り刻み自由に研究ができる対象と言えるだろう。
企業利益と言う観点からすれば正道と言える。
だが、人の感情はそう簡単に割り切れるものではない。
「それでついな。娘じゃないとはわかってるんだがな。ワシのシアワセ魂も地に落ちたものだ」
自嘲的に笑う。その生涯を社に捧げながら、最後は社命に背いた愚かな老人である、と。
「あー、人としては大変結構だとは思いますけどね」
渡されたクレッドスティックを振り言葉を続ける。
「で、あたしは何をさせて頂けばよろしいんですかね。いくら大将軍の依頼でもシアワセと正面から殴り合いはできませんよ」
笑みを抑え、ナガヤマが口を開く。
「すまんな、古馴染みに会えたのが嬉しくてな。おまえさんに頼みたいのは娘の護衛、いやスマグリング（密輸）や」
ティターの表情が引きつる。
「貸しのあるイーボのコーディネーターに話をつけていてな、娘の企業移籍の手続きは完了している」
「彼女がイーボに辿り着きさえすれば、ですね」
子供のような笑みを浮かべるナガヤマ。
「その通りだ。部下どもがもう少し無能なら神戸空港から飛ぶつもりだったが難しそうだ。で、次善策として六甲アイランドターミナルに密航船を手配している」
再度クレッドスティックを振るティター。
「これはロシアまでの護衛も含まれていると言うことですね」
「いや、密航船はイーボのものだ。船にいるミスターグリーンに引き渡してくれれば構わん」
何もなければ車で３０分程度の距離だ。
シアワセのブラックオプチームの気合いにもよるが、これで３０万は確かに美味しい仕事だ。
「わかりました。お引き受けいたします」
ナガヤマは娘に告げる。

「タカコ、そう言うわけだから彼女について行くと良い。元気でな」
タカコと呼ばれた女性はぺこりと頭を下げる。
「では、また。娘さん確かにお預かりします」
そして、二人の女性が三ノ宮の街に駆け出した。
ティターが誘惑を感じないと言えば嘘になるだろう。
３０万ニュー円と言えば大金だが、契約不履行を正せるものはすでにいない。
タカミを見捨てて３０万をポケットにいれる。
もう少しリスクを犯すなら彼女と大将軍をシアワセに届ける。
あるいはよそのメガに売る。
より儲かりリスクの少ない選択肢はいくらでもある。
しかし、彼女はタカミを逃がすために動き始める。
契約書など存在しない仕事だ。たからこそ、信用とは得難い資産である。
ゆえに信頼を裏切らない。
それも１つの要因だ。
プロとしての矜持もある。自分たちは金のためにだけ尻尾を振る犬ではない、と。
それもある。
だが、ティターは律儀なのだ。潔癖と言い換えても良い。
信頼には信頼で返したい。
だからこそ彼女はアレスのブラックオブチームを抜け、野に下った。
自らの価値観を護るために。
ゆえに、誘惑は感じても彼女は迷わない。
自らの生き方を貫くために。
とはいえ、シアワセの本気具合にもよるが、メイジ１人で出来ることには限りがある。
幸いデイリーランにしては報酬は潤沢だ。
ティターは報酬とリスクを独り占めする程守銭奴ではない。
特に常々リスクを山分けできる相手を切望している。

今回の仕事でシアワセは特殊部隊を展開しているようだが、指名手配をしているわけではない。
つまり、敵の手数は限られているし、表立って重火器は使えない。
囮を使うしかないだろう。
矢継ぎ早にメールを打つティター。
その間も足を止めず移動し駅構内にあるファーストフード店、マックフュージに入る。
いくつか確認事項もある。
茫洋とした目でティターを眺めるタカミ。
「どれくらい自分のことは覚えてるの」
店に腰をおろすとティターがタカミに声をかける。
「ほとんど何も覚えてないんです。悪夢から覚めたら何もわからなくなったみたいで」
その時を思い出したのかぶるりと身震いをする。
「何とかごまかそうとしたのですが、すぐにばれて。旦那さんが先程のお爺さんに相談して今にいたる感じです」
大将軍の娘だ、旦那さんとやらもシアワセの人間だろう。
であれば、この旦那も社命を無視して彼女を逃がしたことになる。
シアワセ的にはともかくとして人間的に好きな部類に入る。
そんなことを思いながらティターは口を開く。
「じゃあ責任重大ね。幸せにならなきゃね」
「はあ」
タカミはよくわからなげに返事をする。
「で実務的な話だけとお金ある？」
タカミはクレッドスティックを取り出す。
「これですよね。お爺さんに渡されました」
「ＯＫＯＫ。コムリンクは？」
机の上にコムリンク、汎用的なタブレットのような端末、を出す。
可愛らしいデコレーションが施されている。
「電源を切るように言われて電源を落としています」
さすがに大将軍も即座に偽造ＳＩＮは用意できなかったのだろう。

偽造ＳＩＮがなければ、認証の必要な高セキュリティーエリアを避ければ電源を落としておくのが無難だろう。
「さすがそつが無いわね」
そんな２人に２ｍはある長身の黒人男性が近づく。
「またせたな」
男はコムリンクとメモリーを差し出す。
「さすがに早いわね。助かったわ」
ティターと男性は旧知らしく素直に受け取る。
ティターが依頼したのはコムリンクと偽造ＳＩＮ。
調べられたらすぐに偽物とばれるぐらいに粗悪なものだ。
だが逆に考えれば調べられさえしなければバレない程度にはしっかりできているのだ。
「全く俺にわざわざお使い頼むかね」
肩をすくめながらぼやく。
「これを取りに行く余裕もないのよ。
で、悪いけどもうひとっ走りお願いできるかしら」
ティターは二人に今後の予定を説明し始めた。
関西スプロール　大阪エリア　シアワセ本社
そこには１０人以上のカンパニーマンが詰め、皆無言でデータ処理に集中している。
ここはシアワセ本社内にある作戦管制室。
現在ナガヤマ親子の追跡を指揮している。
大将軍の殺害には成功し、あとは娘だけである。
心なしか実働部隊からは弛緩した雰囲気が漂っている。
「隊長、ナガヤマ・タカコのＳＩＮがアクティブになりました。追撃に移ってよろしいでしょうか」
部下の問いに隊長が答える。
「放置もできまい。１班を対応に回せ」
部下に指示をしながらも隊長はわずかな違和感を感じていた。
確かにナガヤマ・タカコは一般人であり偽造ＳＩＮの使用も思いつかないだろう。

であれば移動するには自らのＳＩＮをアクティブにせざるを得ない。
師匠であるナガヤマは常に言っていた。わかりやすい解答には罠がある、と。
「ＳＩＮがアクティブ化された際に位置が交差した他のＳＩＮが無いか調べて見ろ」
大将軍が何か仕掛けているならわかりやすい情報は全て罠の可能性がある。
だが、この電子認証社会で電子的な痕跡を残さずに移動はできない。
整理し洗い出し可能性を減らしていく。
思考と動作。その合計が目的に間に合うかどうかでしかない。
迅速に確実に。微笑みを絶やさず。それがシアワセマンの矜持と考え、彼は自らの師匠の娘を追い込む網を編んでいく。
そこには一片の迷いもない。
関西スプロール　神戸エリア　シアワセ電鉄車中
ウェーブのかかった髪の黒人エルフと日本人形のような女性が観光ガイドを手に車中で楽しげに会話している。
海外からの旅行者を案内する日本帝国人といった雰囲気だ。
ティターとタカコである。
監視カメラの顔認証にかからないように顔を変化させている。
偽装は最小限にし、ただ人ごみに紛れる。
そして、仲間のデッカーには無関係な同業者の足跡を不自然に見えるように消させる。
リガーのブラックシュートにはまるでタカコが切り換えたように見える偽造ＳＩＮを持って走ってもらう。
タカコの本物のＳＩＮはヤマト運輸に任せた。
行き先は熊本城にしている。
もちろん意味はない。
不自然な痕跡を洗えば２人が浮かび上がる。そして、人員がそちらに割かれている間にティター達は船に到着すると言う寸法だ。

もちろん、シアワセの対応がティターの予想よりも遅ければではあるが。
「次は六甲道、六甲道」
社内にアナウンスが鳴り響く。
六甲道は未だに昔ながらの酒造りが息づく場所だ。
それを買えるのは一部の特権階級層のみだが、文化事業として広く一般に開かれている。
当然観光客も多い。
紛れてしまえば偽造ＳＩＮが特定されていなければ逃げきることは容易い。
現在の六甲アイランドは液状化が激しく危険区域として閉鎖されている。
以前はいくつかあった陸路はすでに倒壊しており役にたたない。
だが、そんな地区だからこそスマグラー御用達の港となっており、スネに傷持つ者が隠れ潜むスラムとなっているのだ。
そのため適切な伝手があれば漁船を使って渡ることは難しくはない。
そう普段であれば。
電車を降り、ブラブラと海辺を目指すティターの下に続々と凶報が届く。
曰く、ヤマト運輸に預けたコムリンクが干渉された。
曰く、足跡を消したランナーにシアワセが接触した。
曰く、ブラックシュートが壮絶なカーチェイスを行い、警察に確保された。
もちろん、仲間達がティターのことを話すとは考えていないが、急拵えの偽造ＳＩＮであるタカコの偽造ＳＩＮからある程度の絞り込みを受けている可能性はある。
更にタカコと合流した場所も問題だ。
三宮から安住の地を目指すなら空路か海路が妥当だ。
正規ルートにもフェイクは仕掛けているが、恐らくすでに潰されているだろう。

じわりじわらと包囲網が狭められている嫌な感じがある。
そして、有名なスマグリングポイントである六甲アイランドもノーマークとは考えにくい。本土と人工島の間を封鎖、もしくは監視していると見るべきだろう。
そもそも、六甲アイランドは立ち入り禁止区域なので理由を説明せずに警備を強化するように圧力をかけるぐらいは容易い。
そうすれば、カンパニーマンを割り振らずに網を張れるわけだ。
かの推測が正しければ海上封鎖をしているのは神戸市警となる。
精鋭化された組織とは言えＳＷＡＴチームを投入しているとは考えにくい。
この間隙を縫うしかあるまい。
「タカコさんは泳ぐの好き？」
世間話の延長で問いかけるティター。
「どうなんでしょうか。泳いだことはないのですが」
怪訝そうなタカコとにっこり微笑むティター。
「苦手じゃないっての良い情報ね」
「お、およぐんですか？」
海水浴場でない以上水着にはなれない。
そして、度重なる環境汚染により海は綺麗とは言えない。
だが、ティターは当然のように応える。
「そうよ。選択肢ないし」
ティターの感覚としては状況は詰みかけている。
だが、まだ詰んではいないし、ここで逃げるようならランナーなどと言うヤクザな商売をしてはいない。
ティターは渡し守と呼ばれる相手をコールする。
「近くまで来たけど、どう？」
「あかんな。今日は神戸市警のラッキーデイや。日改めてもキャンセル料はいらへんで」
鼻で笑うティター。
「悪いけどあんまり時間ないのよね。追加で支払うから無線操作できるモーターボートを貰えるかしら」

「そらええけど。あいつら警告無視したら撃ってくるで」
ティターは華のような微笑を浮かべ告げる。
「鉛玉が怖くてランナーなんてできないわよ」
渡し守から借りたモーターボートが低重音のエンジン音を響かせ始動する。
当然網を張っている警備部隊は周囲を見渡すが、その姿は見えない。
透明化の呪文だ。
「魔法使いか。音をさせちゃ意味がないな」
彼は即座に赤外線及びエコーカメラを向ける。
透明化の呪文は視覚を騙すための呪文であり超音波の跳ね返りを画像処理で表示するエコーにたいしては効果を持たない。
「5秒数える間に停船せよ。さもなくば発砲し強制的に停船する」
もちろん、不可視のモーターボートは停船しない。
警備船より火線がほとばしる。更に数秒逃走を続けた後に船舶は停船する。
エンジンを撃ち抜いたのは間違いないが搭乗者の状態はわからない。
未だに透明化は解除されていない。
更に銃弾を叩き込むべきか迷っていると不審船が姿を現した。
船底に横たわる人影が1つ。
警備船の隊長の胸に嫌なしこりがひっかかる。何かがおかしい。
慎重にモーターボートに警備船を近づける。
先ほどの超音波カメラでモーターボートに隠れている相手がいないかを探る。
「人じゃないぞ。精霊だ!」
その瞬間地面に倒れていた人影が跳ね起きる。
そして、人類には不可能な程口を開く。
「外れだ!」
唖然と精霊を凝視する警備隊を尻目に精霊は楽しげな笑いをあげて姿を消す。

それに連動するようにモーターボートは静かに沈んでいく。
少し離れた波間にポッカリと不自然に空いた穴が２つ。
完全透明化により姿を消したティター達だ。
ティターの手持ちの呪文では完全な偽装はできない。
荒事になり神戸市警に本気を出されると勝ち目はない。
仕方なくモーターボートを囮にして自分たちはライフジャケットをつけて泳ぐことにしたのだ。
近くで見れば不自然な水のくぼみも少し離れてしまえば波間のイタズラに見える。
幸い時間に余裕はある。
その後特別なトラブルもなく、疲労困憊こそしたものの、六甲アイランドに辿り着いた。
ティターの六甲アイランドでの友人に迎えに着てもらい埠頭を目指す。
埠頭ではすでにイーボの船が停泊しているはずだ。
埠頭につくと積み込みの指揮をする全身緑の男がいる。
それなりに名の売れたイーボのジョンソン、ミスターグリーンだ。
ティターとも旧知の関係である。
「やあ、ティター。将軍から話は聞いてるよ」
怪訝な顔のティター。
「将軍から聞いた？　いつよ」
「今朝だったかな。都合が悪くなったから荷はティターに任せると」
タイムスタンプはティターに出会う前だ。
「もしかして、あたしと合流するつもりであそこにいたわけ」
「確かに父はティターさんとお会いする前から一緒にいくのはここまでだと」
唖然とするティター。
「怖ろしい爺様だこと。タカミちゃんもＪＩＳで何か用があったら声をかけてちょうだい。」
タカミは微笑みを浮かべ応える。
「はい、また相談させていただきます」

船に消えていく2人を見ながらティターは関係各所への支払いを処理する。
友人たちも全員無事のようだ。
とりあえず、六甲アイランドで呑んでほとぼりをさますことにしよう。
「渡辺さん、悪いけど着替えを調達してもらえるかしら。で、今回迷惑をかけたみんなに奢りたいんだけどセッティングお願いしてもいい？」
遠く輸送船の汽笛が六甲アイランドの廃墟に響き渡る。

# 外伝：茶畑要塞防衛戦

２０７５年１０月３０日　日本帝国静岡県掛川

ハロウィンを明日に控えた夜。

あたしは掛川茶畑要塞の食堂で早めの食事を取っていた。

「望月隊長、今日は晩飯早いんですね。」

声を掛けてきたのは要塞に詰めているトロールの傭兵である宮川だ。

「ほら明日ハロウィンじゃない。将門公への対応するために朝が早いのよ。」

「俺は去年まだいなかったんで良く知らないのですが、厄介なんですか？」

その質問にあたしは何と答えるか迷いを感じる。準備が大変だけど厄介かと問われると難しい。

「そもそも論として何故将門公が、ここに攻めてくるかわかる？」

宮川はわずかに首をかしげる。

「掛川の西の端にある十九首に将門の首が埋められていて怨霊として顕現して暴れまわる。」

あたしは頷く。

「でも、それは将門公の怨霊がこの地に出る理由で、ここにやってくる理由ではないわよね？」

「確かに。なんでですか、身体でも埋まってるんですか？」

茶畑の中には将門公の身体が埋まっているとか風評被害も甚だしい。

「違うわよ。変な場所で暴れて被害を出さないように誘き寄せてるのよ。」

「え？　あれですか望月さんみたいに茶リキュールのボトルぶら下げてるとフラフラ寄ってくるんですか？」

あたしがここの仕事を引き受けたのは作りたての茶リキュールが飲めるからなのは事実だけど、ボトルにつられたりはしない。

もちろん将門公もだ。

「ここって茶畑を護るための要塞だけど事任八幡宮の摂社でもあるの。祭神は己等乃麻知媛命（ことのまちひめのみこと）で藤原氏つまり摂関家の先祖にあたる方よ。」
宮川が全くわかっていない顔で頷く。
「そして配神には八幡大神と言う天皇家に連なる方が祀られているわ。将門公は当時の貴族政治を正すために今の茨城県で東国独立を主張し討たれた人物なの。だから恨み骨髄の対象になるのよね。」
「それで恨みを晴らすためにここに襲いかかる、と。」
「そう言うこと。もちろん間違って本宮に行かないように色々とトリックは使ってるけどね。」
あたしのような小娘がここの隊長を任されているのは、あたしが摂社を預かる女性神職であることが大きい。
茶葉目当ての野盗団を相手にするのであれば宮川のような荒くれ者共だけで事は足りる。
しかし、将門公のような霊的な存在が関係してくるとなると、あたし達のような神職を中心とした魔法使いの出番となる。
結果的に最大の脅威である将門公対策の効率化を目的として、あたしが隊長となったのだ。
事任八幡宮の神主様とは色々と話し合ったが食前に茶リキュール、食後の玉露をつけてもらうことで引き受けることになった。
食い意地が張っていると言うなかれ。２０００年代初頭の気候変動により茶葉の生産は大打撃を受け、２０７５年の今では茶葉の価値は同じ量の黄金以上の値段で取引されている。この要塞でなければ決して認められなかった条件だろう。
「色々大変なんですね。」
「そうよ、大変なのよって、あなたも他人事じゃないじゃない。」
あたしは視界のＡＲディスプレイに表示される切込み部隊の名簿に宮川の名前があることに気が付き声をあげる。
「そりゃあ俺はバイクリガーですから強行偵察は日常ですが。」
「あー、誰も説明してないのか。ブリーフィングで詳細説明するけど、とりあえず現場の話は聞いといて。」

あたしはこの近くにいる他の切込み部隊員を探す。
いた、エルフのソードアデプトである武山だ。
武山はその無骨な顔からは信じられないほど繊細な手付きで自分の刀のメンテナンスをしている。
「武山！」
「へい姉御。」
あたしは神職なのだから姉御呼びはやめてもらいたいところだ。
「宮川に明日の切り込み隊の仕事説明しといて。」
「ああ。そう言えば初ハロウィンか。ベテラン面してるから忘れてたぜ。おまかせください。」
そう言いながら宮川は武山に連れられて食堂を出ていく。
さて、あたしもお茶を飲んだら軽く書類を片付けて寝よう。
明日は忙しくなる。
翌朝日の出と共にあたしは起床し身を清める。
他の様式の魔法使いに言わせると意味がないのだろうが儀式の朝には必ず清めから始めるようにしている。
采女装束を整え普段はポニーテールにまとめている髪を下ろす。
そして神楽鈴、紙幣を整え儀式の準備は整う。
祭殿で神に祈り、神楽を舞い祝詞を奏上する。
これらは祭神たる己等乃麻知媛命（ことのまちひめのみこと）の託宣を請うためのものだ。最後に琴の音を捧げる。その中で望月は白昼夢を観る。
夜半過ぎの要塞に向かう１９騎の騎馬武者。全ての武者は揃いの鎧に身を包み一身に東を目指す。その途上にあるもの全てを粉砕しようと言う強い意志すら感じる。
そこで望月の視界は現実へと引き戻される。
「本日の将門公は１９騎立てです。皆様準備をお願いいたします。」
この地に葬られた将門一門は１９人と言われている。つまりフルメンバーでご訪問いただける訳だ。
傭兵達の反応は２極化している。歓声を上げている者と悲痛な顔をしている者だ。

当然ながらこの要塞に集う傭兵の多くは金が目当てだ。自らの命を対価に金を稼ぐ伝統的商売だ。

しかし、一部には歴史オタクやバトルジャンキー、それも近接戦闘へのこだわりのある連中がいる。戦国時代なら剣客と呼ばれるに相応しい連中だ。歓声を上げているのは後者だ。将門公には将門公のルールに従って相対する必要がある。

つまり、合戦をする必要があるのだ。本物、少なくとも本物のように見える鎌倉武士と相まみえることができることに喜びの声を上げているのだ。

相手の数が多ければ出撃人数も増えるし場合によっては入れ替わりもある。

あたし達はその後慌ただしく夜に向けて準備を整えて将門公の到着を待つことにする。

夜半過ぎ。あたしと巫女達は将門公の来られる方向を向けて建てられた神楽殿で待機している。もちろん要塞の外だ。

将門公は怨霊と呼ばれているが掛川の神であることに変わりはない。慰撫し守護いただけるようにする。これはそんな祭礼でもある。故に失礼があってはならないし、将門公のルール、合戦の作法に従わなければならない。

あたし達の正面にはバイクに乗った荒くれ者が２０人、馬に乗った武人のような面構えの荒くれ者が１０人いる。その中には武山も宮川もいる。共通なのは甲冑ふうのアーマージャケットを着ていることと腰に刀を履いていることぐらいだ。他は性別も種族も統一感はない。

「さあ、あんた達将門公との合戦よ。あたし達の所まで通すのは論外だけど、死なないようにね。」

「もちろんですよ、姉御！」

「巫女さんを守って戦うシチュエーション最高ですね！」

「今宵の愛刀は血に飢えておるわ。」

統一感がないのはいつものことだ。やる気があって結果さえ出してくれればそれで良い。

「いつもならだいたい５００ｍ程度の位置に顕現なされるわ。まず、口上交わすから、その前に攻撃しないように。」
　将門公の祀り方がわからない覚醒初期には正面から戦い酷い被害を出したこともあると聞く。
「その後胸壁から援護射撃をしてもらうから、その後突撃よ。」
　これに応えるように胸壁の狙撃部隊がライフルを掲げる。
　矢戦を前衛が受け持たなくても良いのは本当にありがたい。
「その後は組み討ちよ。将門公がご満足されるまでよろしく。」
　そして帯陣することしばし。忽然と生きているかのような将門公一門が姿を現す。
　だが、その位置は想定していたよりも近い。そして戦場に立つ者全ての頭の中に声が鳴り響く。そこには圧倒的な覇気があり畏怖から膝を屈する誘惑にかられる。
「ヤアヤア、我こそは桓武天皇四代の皇胤、高望王の三男の鎮守府将軍平良将の子平将門なり。下総国・常陸国を統べし新皇。悪逆非道なる政を執り行う朝廷を天孫の末裔たる者の義務として天誅を下す所存である。疾く我が軍門に下るが良い。」
　あたしは膝を折りたくなる誘惑をねじ伏せ敢然と将門公に目を向ける。
「ヤアヤア、我こそは忌部の祖神の妻神にして藤原家の祖神天児屋命の母神許等能麻知媛命を奉じし事任八幡宮の神主、望月みやこなり。政の無道はすでに正され世は王道楽土と呼ぶに相応しき世となっております。そこに反旗を翻す将門公こそ、無道ではございませんか。」
「確かに飢えるものは減り、暮らしは楽になっておろうが、富める者が更に富み、貧しき者が更に貧しくなる世の何が王道楽土か。」
「ならば致し方ありません武により我らの正しさを証明いたしましょう。」
　そう言い捨てあたしは鏑矢を構え撃ち放つ。
　鳥の鳴くような音をたて鏑矢が飛ぶ。これに合わせ将門公の軍勢が矢を弓に番える。
　ここからのあたしの仕事は神職としての仕事を全うするだけだ。

神楽鈴を打ち鳴らすと清浄な鈴の音が辺りに響き渡る。あたしはただ無心に祝詞を奏上する。それに合わせ巫女達が舞う。
将門公からの矢が降り注ぐが前衛達はうまく避けている。胸壁からの数十の狙撃はまるで単一の射撃かのように射撃音が鳴り響く。その集中した火線ですら一撃で郎党を屠るには至らない。しかし愚直なまでの集中砲火により前衛が相敵する前にかろうじて郎党の一柱を退散させる。
そして最初に突撃するのはバイク部隊だ。神経直結により操作し近接戦闘に特化した特注のバイク部隊だ。彼らが内燃機関の運動量を破壊力に替え手持ちの刀を叩きつける。しかし、敵もさるものカウンターで斬り込まれる斬撃により損耗はこちらが多い。
そして騎馬に乗ったアデプト剣士団が突入し斬り結び始める。将門公と切り合っているのは武山だ。
ただ、仲間の無事を祈りながら奏上する。
そして１０分ほどの濃密の時間が過ぎたとき手応えを感じる。全意志力を投じ将門公を押し返す。
これにより将門公は現れた時と同様に忽然と姿を消す。
あたしはＡＲに映る仲間たちのバイタル情報に目を向ける。どうやら死者はいないようだ。重症者には余力のある覚醒者達が治療へと向かう。もちろん医療部隊も要塞から出てきている。
「おわったぁ。」
そんなことを叫んだのは将門公が退去してから3時間程経過してからだ。
自分へのご褒美に食堂へと向かい緑茶リキュールを貰う。
炭酸と緑茶の爽やかな香りが疲れた身体に染みる。
さて、また、今日から日常が始まる。
ひとまず眠りにつくとしよう。